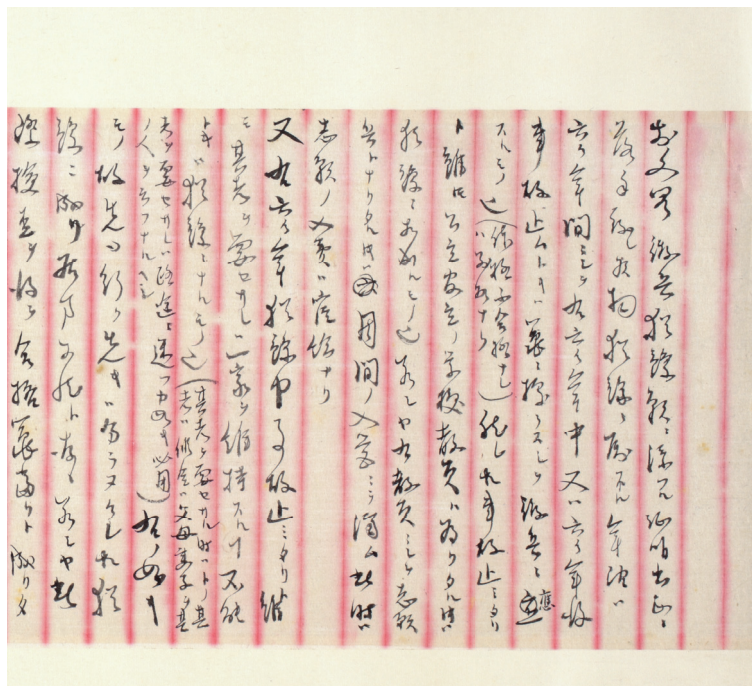


影印

1 明治二三（一八九〇）年一月二日

朱野卷紙 墨書

巻紙



翻刻

前文畧 徴兵²猶豫願ニ係ハル証明書正ニ
落手致シ候扱猶豫ニ属フル年限ハ
六ケ年間ニシテ右六ケ年中又ハ六ケ年後
事故止ムトキハ³據ラスシテ徴兵ニ應（二字訂正）
スルモノ也（⁴結極不合格ナレ）然レ共事故止ミタリ
ト雖臣公立官立ノ学校教員ト為リタルハ
猶豫ニ相成ルモノ也若シヤ右教員ニシテ志願⁴
兵トナリタルハ六週間ノ入営ニテ済ム此時ハ
志願ノ入費ハ官給ナリ
又右六ケ年猶豫中事故止ミタリト雖
モ其者ヲ要セサレハ一家ヲ維持スル¹不能
トキハ猶豫ニナルモノ也（⁵其者ヲ要セサル時ハトノ其
者ヲ要セサレハ路途ニ迷フカ如キ必用）右ノ如キ
モノ故先日行ク先キハ分ラヌケレ共猶
豫ニ成リ居事可然ト存候若シヤ此
際検査ヲ得テ合格圖當リト成リタ

注

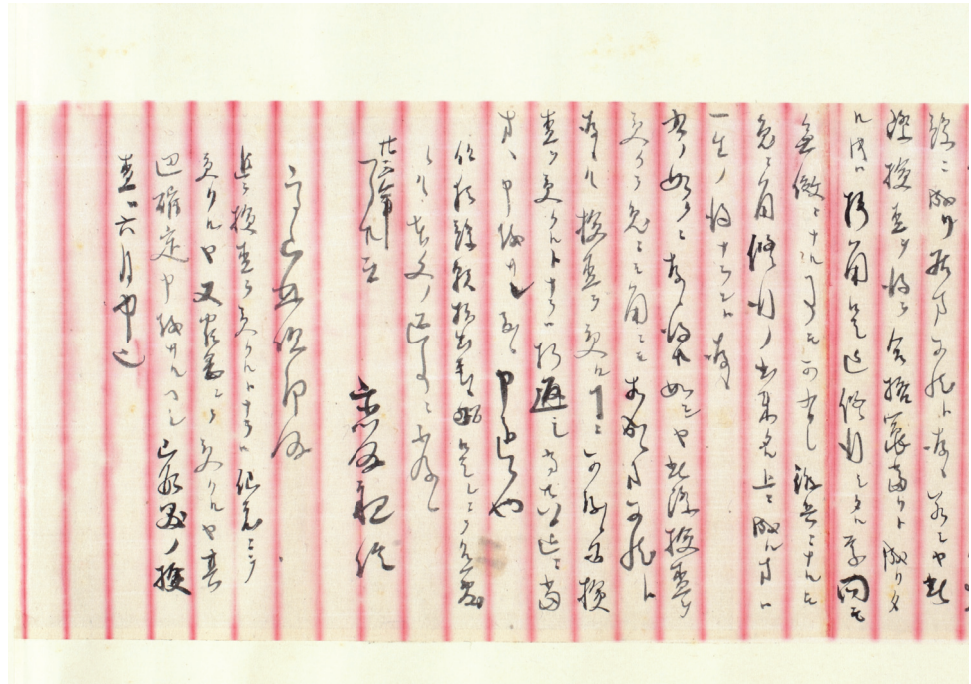
書簡53-1-1 本学図書館管理番号。
以下同様、冒頭に示す。

1 書簡後付け（書簡の末に付され
る、日付・署名・宛名・脇付）の日
付に拠った。

2 明治二二（一八八九）年一月
二一日、大改正後の「徴兵令」が
公布された（「官報」第一六六七号
明治二二・一一・二二 内閣官報局）。
樗牛はこの時第二高等中学校生徒
であつたため、猶予を願ひ出るこ
とができた。

3 「徴兵令」（官報）は「籤」。

4 志願兵について二年十一月
一二日に公布された改正追加後の
条文「満十七歳以上満二十六歳以
下ニシテ官立府県立師範学校ノ卒
業証書ヲ所持シ官立公立小学校ノ
教職ニ在ル者ハ六週間陸軍現役ニ
服セシム其服役ニ関スル費用ハ官
給トス」（「官報」第一九一四号 明
治二二・一一・一三 内閣官報局）
に注目したもののか。



ル片ハ折角是迄修行シタル学問モ
無効ニナル事モ可有候徴兵ニナルモ
免ニ角修行ノ出来タル上ニ成ル事ハ
一生ノ得ナラント存候

右ノ如クニ存候得共如シヤ此際検査ヲ
受ケテ免ニモ角ニモ相成候事可然ト

存候共検査ヲ受ル_レニ可存候羽檢

査ヲ受クルトナラハ折返シ當廿八日迄ニ當

方ヘ申越サレ度候申送候也

但猶豫願指出致候_(二字訂正) 間是レニテ宜敷

候共本文ノ返事ニ不及候

廿三年

一月廿二日

高山林次郎殿

齋藤親信⁵

追テ検査ヲ受クルトナラハ仙臺ニテ

受クルヤ又窪岡ニテ受クルヤ其

辺確定申越サルヘシ山形縣ノ檢

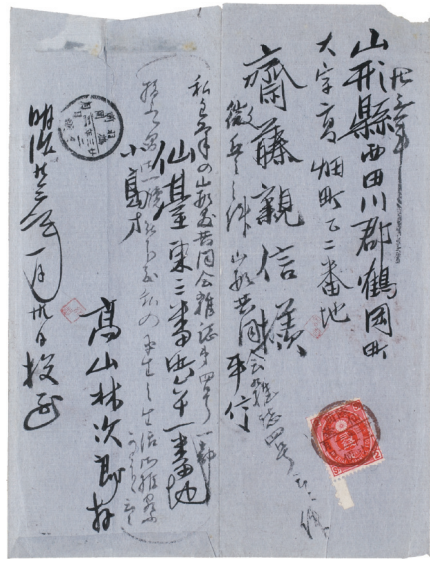
査ハ六月中也

II 高山樗牛書簡三十通

影印

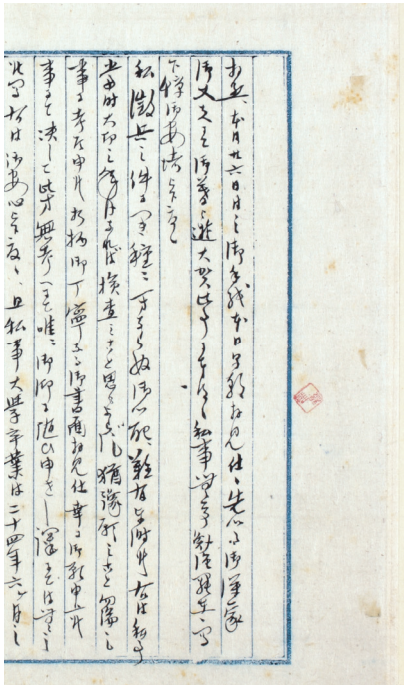
1 明治二三（一八九〇）年一月三〇日

封筒 野紙二枚 墨書



封筒表

封筒裏



第1紙

翻刻

〔宛先〕 山形縣西田川郡鶴岡町

大字高畑町乙二番地

◇（朱角印）

齋藤親信様

平信

〔切手〕 式錢

〔消印〕 陸前／仙臺／廿三年一月／三十一日／ホ便

〔付記〕 廿三年

〔付記〕 徴兵之件山形共同会雜誌四号云々儀

〔差出〕 仙臺東三番町六十一番地

小島方

高山林次郎拜

◇（朱角印）

〔日付〕 明治廿三年一月卅日投函

〔消印〕 羽前／鶴岡／廿三年二月／二日／□□

〔付記〕 私主筆の山形縣共同会雜誌才四号一部

指上候間御一讀被下度私の平生之生活御推察

可被下候云々

◇（朱角印）

拝啓、本月廿六日付之御手紙本日早朝拝見仕候先以而御

渾家

御丈夫にて御暮被遊大賀此事に奉存候私事無事勉強罷在

候間

乍憚御安堵被下度候

私徴兵之件につき種々一方ならぬ御心配、難有奉謝候右

は私事

當時大切之年月なれば検査之こと思もよらず猶豫願之こ

と勿論之

注

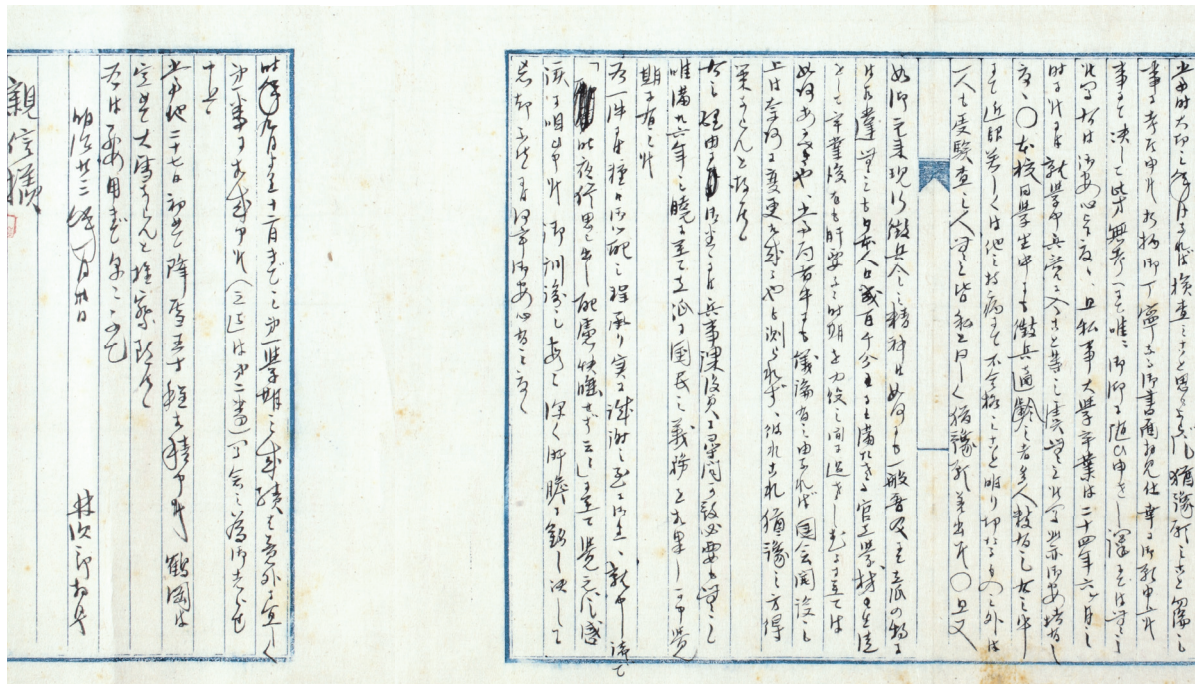
書簡53-1-1（封筒）

書簡53-1-2（本文）

『全集』既収録。封筒表裏の記載を削除し「仙台より／国元の実父へ」とする。

父へ」とする。

1 書簡後付け、「明治廿三年一月卅日」に拠った。



第2紙

事に考居申候折柄御丁寧なる御書面拝見仕幸に御願申上
候
事にて決して此方無考へにて唯々御仰に随ひ申せし譯に
ては無之
候間右は御安心被下度候、且私事大學卒業は二十四年六²
ヶ月之
時に候に付就學中兵營ニ入ること尋之虞無之候間此亦御
安堵有之
度候³○本校同學生中にも徴兵適齡之者多人數有之右之中
にて近眼若しくは他之持病にて不合格之こと明り切たる
もの之外は
一人も受験査之人無之皆私と同じく猶豫願差出候⁵○且又
如仰元未現行徴兵令之精神は如何にも一般普及にて立派
の物に
は相違無之も日本人の幾百千分(二字抹消)にも満たざる官
立學校(二字抹消)生徒
をして卒業後をも肝要なる時期を力役之間に過ぎしむる
に至ては
如何あるべきや、當局者中にも議論有之由なれば国会開⁶
設之
上は奈何に変更相成るやも測られず、彼れこれ猶豫之方
得
策ならんと存居候
右之理由に(二字抹消)御坐候に付兵事課役員に尋問可致必
要も無之
唯滿廿六年之曉に至て立派に国民之義務を相果し可申覺
期に有之候
右一件に付種々御心配之程承り実誠謝之至に御坐候就
中讀て⁷
「(二字抹消)昨夜猶思ひ出し配慮快睡せず云々」に至て覺え
ず感
涙に咽び申候御訓諭之段々深く肝膽に銘し決して

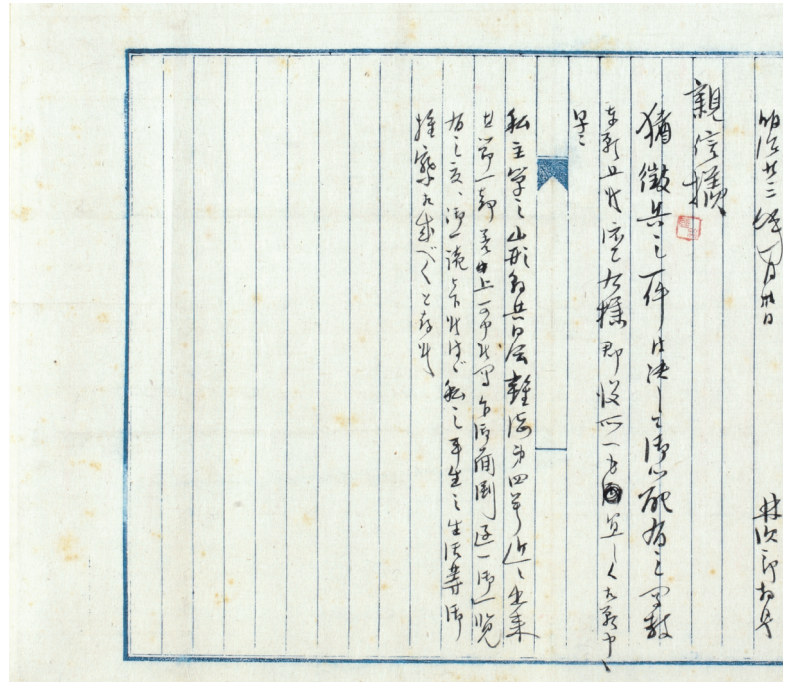
2 『全集』は「六月」。

3 「○」を『全集』は削除。
全集は「明」とする。

5 注3に同じ。

6 明治一四年一〇月一二日の
「国会開設ノ勅諭」(詔勅集)明治
四一・三・二六 弘文書院)には、「将
ニ明治廿三年ヲ期シ議員ヲ召シ国
会ヲ開キ」。

7 『全集』は「感謝」。



忘却不仕候に付何卒御安心有之度候

昨年九月より十二月まで之才一學期之成績は意外に宜し

く

才一番に相成申候(之迄は才二番)間念之為御しらせ

申上候

當地二十七日初めて降雪五寸程相積申候鶴岡は

定めて大雪ならんと推察致居候

右は要用まで早々不乙

明治廿三年一月卅日

林次郎拝具

親信様

□(朱角印)

猶徴兵之一件は決して御心配有之間敷

奉願上候依て右様郡役所へも(二字抹消)宜しく相願申候

早々

私主筆之山形縣共同会雜誌才四号近々出来

其節一部差(二字抹消)上可申候間乍御面倒逐一御一覽

有之度、御一読被下候はゞ私之平生之生活等御

推察相成べくと存候

8 「明治廿三年」から「親信様」まで、『全集』は削除。

9 『全集』は「御願申候」。

10 「山形県共同会雑誌」についての、小野寺凡「人間高山樗牛」

『高山樗牛研究資料集成』第五巻平成二六・九・二五 クレス出版

の調査に拠ると、左は樗牛作。

・第二号 明二年六月一八日

「ジャン・ダーク伝」(史伝)

高山林次郎

・第三号 明二年一月三日

「ペスタロデー伝」(史伝)

高山林次郎

・第四号 明三年一月二〇日

「チヨースー伝」(論説) 高山林次郎

「宮城集治監を觀るの記」(雑

録) 樗牛山人高山

「雑報」 高・林

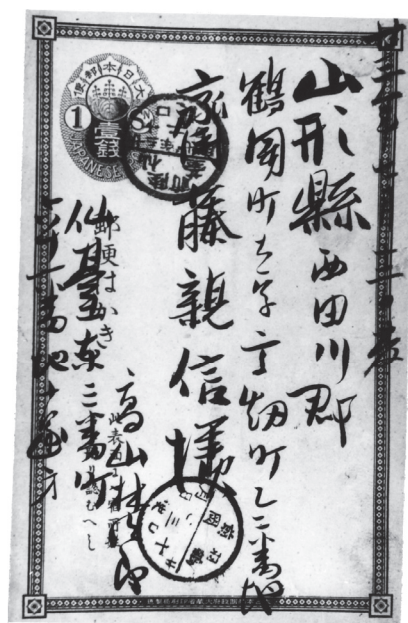
【補注1】

親信書簡が樗牛に提示した徴兵問題について、樗牛は、猶予願いを出す方針であり、徴兵検査は受けない旨を明確にした。同級生も、近眼や持病があり不合格となることが明らかな者以外は、徴兵検査を受けないと伝えている。

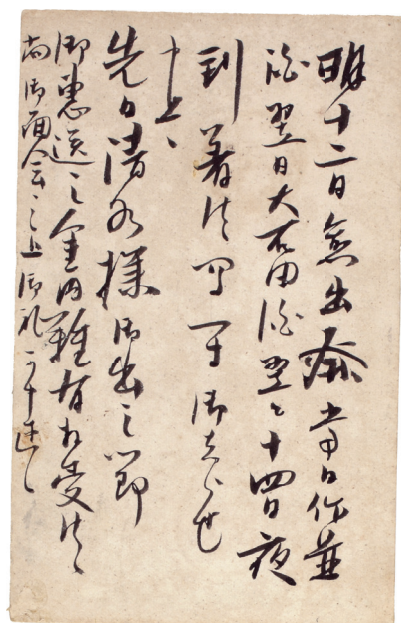
親信が樗牛宛に書簡を書いた二三日、樗牛は養父久平宛に書状(『全集』収録)を送っており、「私儀本年十二月にて満二十年に付、本年徴兵適齡に有之候得共、高等中学生徒に付、学校長之証明書相添、鶴岡之役場へ相差廻候間」としている。なお、養父らは東京在住のため、鶴岡在住の実父親信に依頼する旨を記している。

2 明治二三（一八九〇）年七月二日

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕

山形縣西田川郡
鶴岡町大字高畑町乙二番地

〔差出〕

齋藤親信様
高山林次郎
仙臺東三番町
六十一番地小島方

〔消印〕

陸前／仙臺／廿三年七月／十二日／口便
羽前／鶴岡／廿□年七月／十三日／口便

〔付記〕

廿三年七月十二日發

2 『全集』は「愈々」。

3 清水親和。齋藤親信の第二子
（橋牛の実姉）もと子の夫。

書簡53-4-1
『全集』既収録。葉書表の記載
を削除し、「仙台より／国元の実
父へ」とする。

1 後付けはない。消印は「廿三
年七月十二日」であるが、書簡に
「明十二日」とあるので、一日
に書いたもの。

【補注2】

「愈出発」の葉書は、夏季の休暇を利用して、仙台を出発すると伝えた。旅程は、作並、大石田、夜に到着とある。仙台から鶴岡へ向かう道順であり、実父が住み、樗牛自らのふるさとでもある鶴岡に向かおうとしていることがわかる。

『高山樗牛資料目録』『解題』に、次のような一文がある。「幕末から明治年代にかけての当主久平は、明治5年に酒田県出張所雇となり、山形県、福島県に奉職し、さらに警視庁に勤めた（明治23年まで）人である。」これを言い換えれば、二三年に久平は警視庁を退職したことになる。それを思わせる書状が『全集』にある。明治二三年五月一六日、東京在住の養父母宛の一通である。

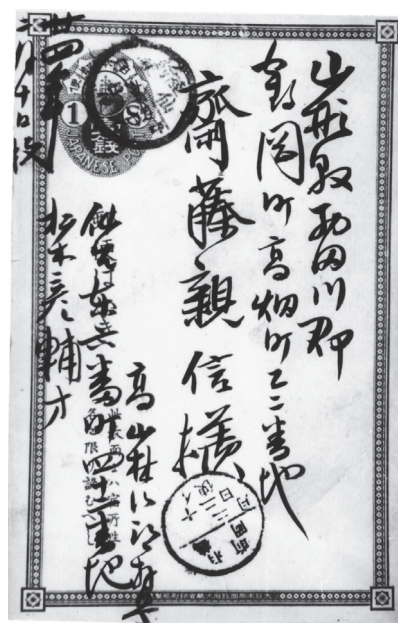
本月十四日付之御手紙、（中略）思ひもよらざる此度之事実に驚愕仕候、私も一時は非常の心配にて、茫然と致居候、乍併無心配勉強致せとの御仰せを力に、漸く安堵致候。

樗牛は、この一四日付の手紙で、父が警視庁の職を失う事実を知る。勉学に強い熱意を持つ樗牛は、「此処にて学問を退くは実に此上もなき残念之事に候得ば、何卒御都合之上、資金御統被下度奉願上候。」と訴える。大入学後は、「学課の余暇に私立学校之教師ともなりて、一人の資用は作る積にて候得ば、今より四年の間、私事勉強致し得る程の資金何卒御送被下度候。」とする。

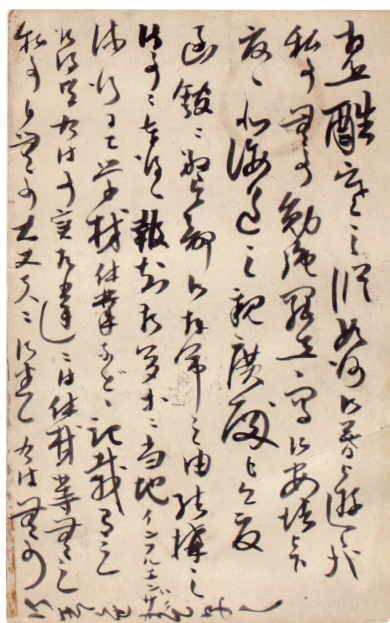
六月一日実父宛樗牛書簡（『全集』）は、実父親信が仙台の樗牛を訪ねたもようで、その礼状である。「御誠諭之趣、一々服膺可仕」とあり、ふたりの間で話し合われた様子が記されている。服膺^{ふくよう}は、心にとめて忘れない意で、「夏季休業之節帰国致し悠々御談可致候」とし、六月一六日養父母宛書状には、「私事夏休業には直に鶴岡に参らんと存候」と書いた。

ところで、六月一二日実父宛に出された書状には、就学期間とともに、「徴兵云々之儀、色々御心配之段難有奉謝候。」とある。学校を去ることは、徴兵猶予に大きく関わる問題であり、実父も樗牛も、当然それを念頭に置いて、対処しようとしていたと考えられる。徴兵猶予問題に継いでおこった学資金支援によって、樗牛と実父親信の関係は密接の度を増したと見るべきであろう。ただし、八月二五日福島県近野衛門治宛書状には、「兎角世事は金にて、小弟なども此末資金永く続く見込無之有様に相逼、実に心痛罷在候」とも記している。

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕

山形縣西田川郡
鶴岡町高畑町乙二番地

〔差出〕

高山林次郎拝具
仙台東六番町四十二番地
松本彦輔方

〔消印〕

陸前／仙臺／廿四年〇月／十日／〇便
羽前／鶴岡／〇〇年二月／十二日／イ便

〔付記〕

廿四年
二月十日投

拝上酷寒之候如何御暮被遊候哉
私事無事勉強罷在候間御安堵被下
度候北海道之親廣殿も今度
函館ニ警部御拝命之由結構之⁴
御事ニ奉存候報知新聞等ニ当地インフルエンザ
流行にて学校休業など、記載有之
候得共右は事実相違ニ付休校等無之
私事も無事大丈夫ニ御坐候右は無事

～叶に中しつゝ返

書簡53-4-2

『全集』未収録。

1 後付けの日付はないが、仙台と鶴岡、二つの消印から、二四年二月一〇日とした。葉書表に、「廿四年」「二月十日投」とある。

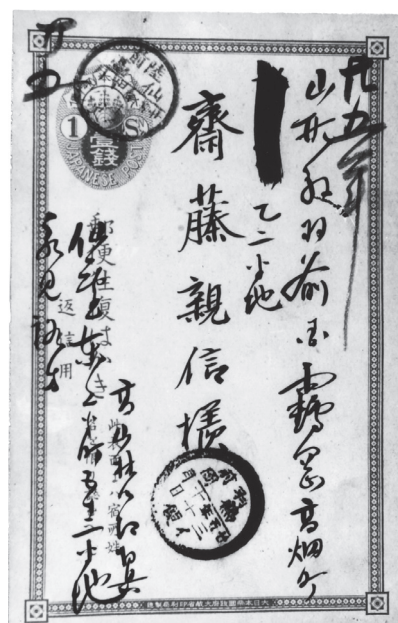
2 『全集』収録の明治二四年一月二九日養父母宛樗牛書簡には「東六番町五十四番地松本彦輔方」に下宿するとあり、『明治文学全集』40（前掲）「年譜」も明治二四年一月の項に「東六番町五十四松本彦輔方に移る。」とするが、同年二月一二日、養父宛の書簡（『全集』）では「東六番町四十二番地に御座候、先日五十四番地とせしは誤りにて候」として、誤記を正している。

3 「親廣殿」。齋藤親信の第一子、樗牛の実兄。小野寺凡「人間高山樗牛」（前掲）は、明治二四年、親廣に「函館警察署、五等（上）警部」の職歴がある旨を指摘する。

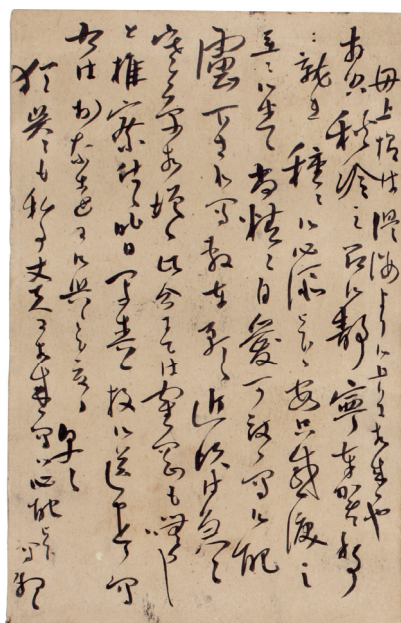
4 明治二四年二月三日の「郵便報知新聞」は「●仙台通信（二月三十日発）／〇第二高等中学校の休業 左まで激烈にはあらざれとも例のインフルエンザ病流行し同校の教員に十余名、生徒中にも亦た同様同病に感染したるものある為め昨今休業中なり」と報じた。

明治25（一八九二）年一〇月二七日（推定）

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 山形縣羽前国鶴岡高畑町

〔数文字抹消〕 乙二番地

齋藤親信様

〔差出〕 高山林次郎拝具

仙臺東二番町五十二番地

永見裕方

〔消印〕 陸前／仙臺／廿五年十月／（不明）

羽前／鶴岡／廿五年十月／三十日／イ便

〔付記〕 廿五年

〔付記〕 廿五

母上様は溫海より御上りに相成候や

拝啓秋冷之節御静寧奉賀候私事

ニ就き種々御心添被下候段只感涙之

至ニ御坐候尚精々自愛可致候間御配

慮下され間敷奉願候近頃は急ニ

寒氣相増候此分にては雀岡も嘸かし

と推察仕候昨日写真一枚御送申上候間

右はおなをに御與被下度候 早々

猶呉々も私事丈夫に相成候間御心配被下間敷候

書簡53-4-3
『全集』未収録。葉書は「大日本郵便壹錢郵便往復はがき」の返信用を使用。

1 後付けはない。仙台差出の消印は、「廿五年十月」までしか判読できず、日は不明。ただし、『全集』収録の明治二十五年一〇月二七日養父高山久平宛樗牛書簡には、「昨日写真一葉御送申上候処、御落手相成候や。」とある。写真を送った日が「昨日」で、翌日にそれを知らせる書面を書き送っている点からすると、実父と養父に宛てたこの二通は、同日に認められた可能性が高い。以上の点から、実父宛本葉書は、養父宛と同じ明治二十五年一〇月二七日に認められたと推定した。

2 『高山樗牛資料目録』は、「永見」とするが、永見が正しい。永見裕は、成田正毅『高山樗牛冥想の松』（昭和一七・三・一 冥想の松保存会）に拠ると、宮城県 of 「学務課属員」として赴任し、（中略）後には仙台第一中学校の教員をした人である。」としている。樗牛は実父に宛てて、「中々厳格之人にて、（中略）以来は御手紙之肩書には永見氏方又は永見裕殿方と御記載被下度候。」と書き送った（明治二五・四・三〇、『全集』）。なお、『高山樗牛冥想の松』は、永見の娘とのロマンスに注目した書である。

3 「溫海」（あつみ）は、山形県鶴岡市の温泉地である。『全集』は「溫海」。「母上様」から「候や」までの一行は、「猶呉々も私事丈」

夫に相成候間御心配被下間敷候」に続く。樗牛はしばしば端の空きに書き入れた。

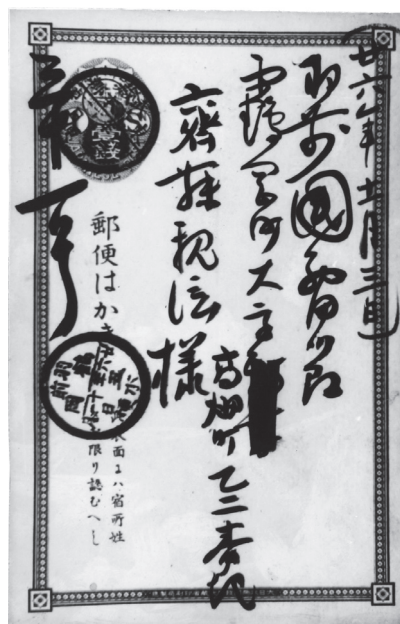
『全集』収録の明治二五年一月九日実父親信宛書簡には、「皆々様温海御入浴の由了承、嘸々愉快之事ならむと存候」とあり、一月二七日の養父宛書簡にも、「母上様には温海御入湯御相応之由」と記されている。

4 注1にあげた養父宛書簡に、実父親信から療養費を送られた旨の記載がある。

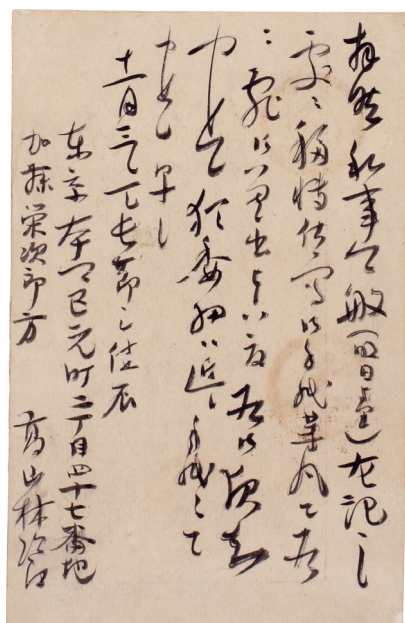
5 『全集』収録二五年一〇月五日実妹直子宛書簡に、「写真の事承知いたし候」とあり、「病氣あげくにて少しくやせたれば、いま十余日を経て後、健康なる顔うつし御送申べく候。」とある。直子の要望によって撮影されたことがわかる。なお、この直子宛書簡の一部は、増補縮刷『樗牛全集』第六卷（前掲）巻頭口絵写真に続く折込頁に載っており、「緒言」に、「郷里鶴岡に在る実妹なを子の近く東京岡田氏へ嫁ぎ行かんとせるに与へし書翰の一節にして」とある。直子の夫となる岡田直方は、工藤恆治『文豪高山樗牛』（前掲）に、「鶴岡の人、工兵中佐」との「註」がある。

5 明治二六（一八九三）年十一月三日¹

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 羽前國西田川郡

鶴岡町大字（字抹漕）高畑町乙二番地

齊藤親信様

〔消印〕 武蔵／東京本郷／廿〇年十一月／〇日／〇便

羽前／鶴岡／廿六年十一月／五日／ホ便

〔付記〕 （廿六年十一月三日）

〔付記〕 三十一号

拝啓私事今般（明日より）左記之

處ニ移轉仕候間御手紙等凡て右

ニ宛御差出被下度右御報知

申上候猶委細ハ近、手紙にて

申上候 早々

²十一月三日天長節之佳辰

³東京本郷区元町二丁目四十七番地

加藤栄次郎方

高山林次郎

書簡53-4-4

『全集』未収録。

¹ 後付け「十一月三日」と、消印の廿六年に拠った。

² 明治天皇は嘉永五（一八五二）年十一月三日生誕。

³ 本葉書と同日の明治二六年十一月三日、養父高山久平宛葉書（『全集』）でも、元町への移転を報告し、「徴兵之件」で御賛助願いたいと記している。『明治文学全集』40（前掲）「年譜」同二六年の項に、「徴兵猶与工作のため本籍を北海道へ移籍」とある。

【補注3】

徴兵は、やはり大きな問題であったようだ。明治二六年七月一〇日、樗牛は第二高等中学校を首席で卒業し、九月に帝国大学文科哲学科への入学を果たしていた。徴兵のいわゆる「猶予」を受ける資格を失う時期をむかえたことになるわけであるが、事態解決のために試みられたのが、北海道への移籍であった。

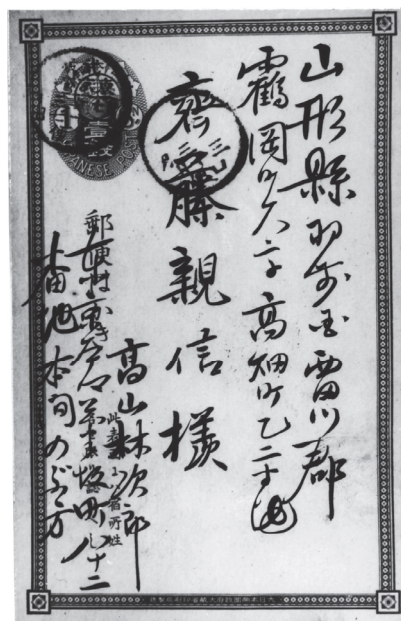
明治二六年一〇月八日、養父母宛の書状（『全集』）には、以下のように記されている。（書面のうち切り取られ存在しない部分が点線で示され、その旨が欄外に註記されている。）

高畑町にては村長をつとめ居候故、移籍之ことは精敷くはじあらせらるゝならんと想像致候故、乍御面倒御願申上候次第に御座候。又鶴岡より年々北海道に移住するもの有之候に付、役場・郡役所辺にては其手続十分くはしく志り居るならんと存候間、甚恐入候得共、御問合の上、其模様御返事被下度奉願候。

翌一月、養父宛書簡（十一月十七日『全集』）に、「北海道室蘭札幌通十一番地に同居之事に都合相成候赴、先程親廣殿よりも御手紙有之、一先ッ安堵仕候。」と書かれている。

6 明治二七（一八九四）年三月二十七日¹

葉書 墨書



葉書表

〔宛先〕 山形縣羽前国西田川郡

鶴岡町大字高畑町乙二番地

齊藤親信様

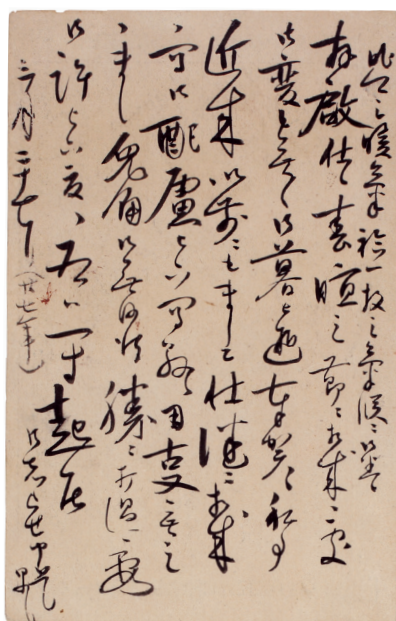
〔差出〕 高山林次郎

東京本郷菊坂町八十二

番地本間のぶ方

〔消印〕 武藏／東京〇〇〇〇／廿七年三月／二十七日／□便

（印字不明） 三月／三十日／ロ便



葉書裏

昨今之暖氣拾一枚之氣候ニ御坐候

拝啓仕候春暄之節ニ相成候處

御変も無く御暮被遊奉賀候私事

近來以前ニもまして壯健ニ相成

候間御配慮被下間敷候用更無之

候まし兎角御無沙汰勝ニ打過候段

御許被下度候右ハ一寸起居

御しらせ申上候

早々

三月二十七日（廿七年）

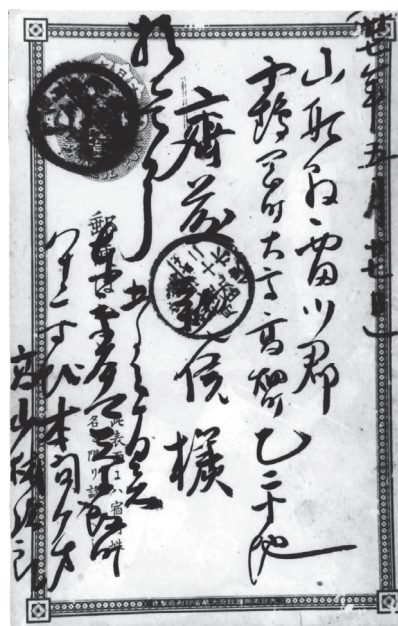
書簡53-4-5

『全集』未収録。

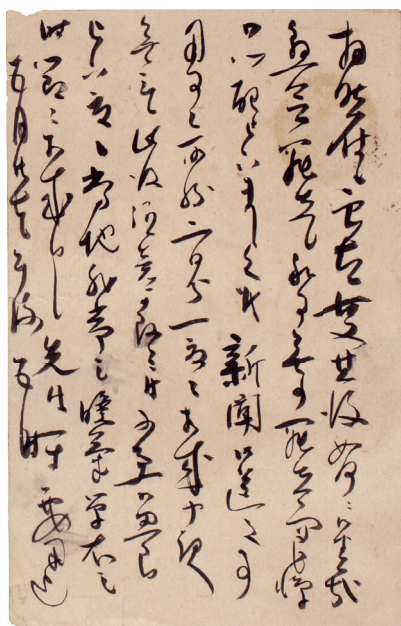
1 後付けの「三月二十七日」と、消印の「廿七年」に拠った。

7 明治二七（一八九四）年五月二七日

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕

山形縣西田川郡

鶴岡町大字高畑町乙二番地

齊藤親信様

〔差出〕

東京本郷菊坂町

八十二番地本間ノフ方

高山林次郎

〔消印〕

武藏／東京本郷／□□年五月／□□八日

羽前／鶴岡／廿七年五月／二十九日／ホ便

〔付記〕

（廿七年五月廿七日）

〔付記〕

拾壹号 五月三十日着

拝啓仕候良太²其後如何ニ御坐候哉

懸念罷在候私事無事罷在候間乍憚

御心配被下ましく候新聞御送之事

用事ニ取紛二日分一度ニ相成申訳

無之候此後注意可改候ニ付不惡御思召

被下度候當地非常之暖氣單衣之

時節ニ相成申候先は一吋要用迄

五月廿七日午後五時

書簡53-4-6

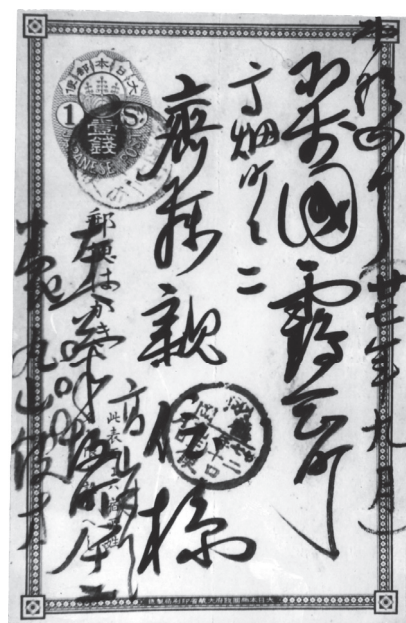
『全集』未収録。

1 後付けは五月廿七日。消印は、二つとも不鮮明であり年が特定できないが、「本間」「本間のぶ」方への下宿は、『高山樗牛資料目録』には、明治二七年とみてよいからと思わせる箇所があり、葉書表に記された「（廿七年五月廿七日）」と一致する。

2 実弟齋藤良太は、体調が悪く、樗牛は非常に心配していた。

8 明治¹二七（一八九四）年九月二日

葉書
墨書



葉書表

〔宛先〕 羽前國靄岡町

高畑町乙二

齋藤親信様

〔差出〕 高山林次郎

卒郷菊坂町八十二

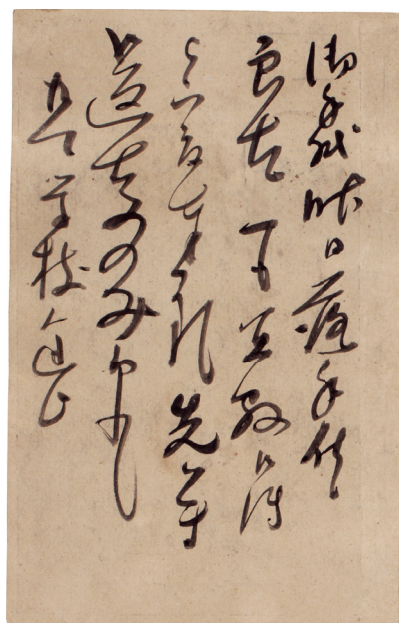
番地丸山館方

〔消印〕 （不鮮明）

小便

羽前／鶴岡／廿七年九月／二十三日／口便

〔付記〕 才拾四号（廿七年九月）



葉書裏

御手紙昨日落手仕候

良太²へも宜敷御傳

被下度奉願先ハ一寸

御返更のみ早く

廿一日学校途上

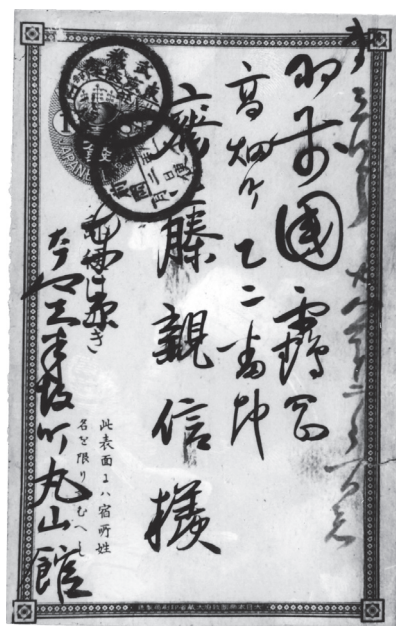
書簡53-4-7

『全集』未収録。

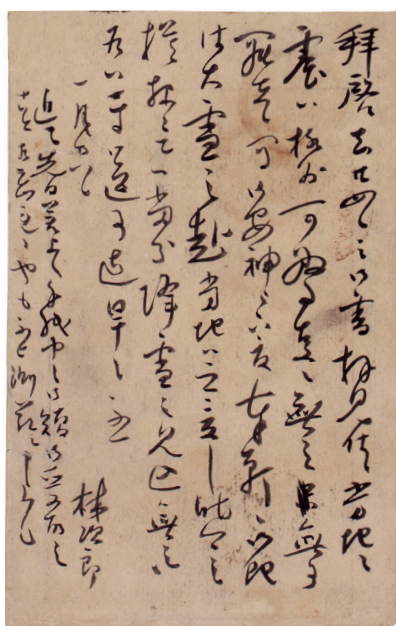
¹ 後付けの「廿二日」と、消印「廿七年九月」に拠った。

² 良太は、阿部正路「齋藤野の人（一）」（前掲）に拠ると、明治六年二月二十六日生まれ、明治二十七年二月二十六日没。

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 羽前國鶴岡
高畑町乙二番地
齋藤親信様
東京
〔差出〕 本郷菊坂町丸山館
武蔵／東京本郷／廿八年一月／廿八日／□便
羽前／鶴岡／□八年二月／一日／□便
〔消印〕
〔付記〕 才三号 廿八年二月一日着

拜啓 去廿四日之御書拜見仕候當地²
震ハ格別可驚変ニ無之^{（二字抹消）} 無事
罷在候間御安神被下度奉願候御地
は大雪之赴當地ハ之ニ反し昨今之
模様ニてハ當分降雪之見込無之候
右ハ一寸御返事迄 早々不一
一月廿八日 林次郎
追て先日差上候手紙中ニ御贈御受取之
こと相忘れ候やもふと測難シ申上候

書簡53-4-8

『全集』未収録。

1 後付けの「一月廿八日」と消印「廿八年」に拠った。

2 地震について、明治二八年一月二〇日「読売新聞」(朝刊3画)は、「●東京に於ける一昨夜の激震」
「一昨十八日午後十時四十八分頃に起れる東京の地震ハ昨廿七年六月廿日の強震と殆んど大差無く何れも寝巻或ハ裸体の儘に往来へ飛出し各町の火の番ハ非常見廻りを出す杯大方ならぬ騒ぎにて府下十五区九郡中家屋の損害人畜の負傷若くハ死傷等少なからねバ左に取調べたる被害の大畧を区郡分にて記載す」と報じている。
一月二八日付養父宛書簡(『全集』)には、「兎角新紙は万事之報導大袈裟にて候。左程可驚地震にては無御座候ひき。」とある。

【補注4】

『帝国文学』（明治二八年一月創刊／大正九年一月終刊／大正三年三月／九月休刊／全二九六冊）について『日本近代文学大事典』第五卷（昭和五二・一一・一八 講談社）は、雑誌全期を次の三期に分かつ。第一期（創刊／明治三八）、第二期（明治三九／休刊）、第三期（復刊／終刊）。樗牛が関わるのはその没年からして第一期のみ。「日清戦争の捷報にともなう国家意識の高揚」（同前）を背景とした時代であった。

明治二六年九月、樗牛は帝国大学文化哲学科に入學。暮れには有志と帝国文学会をおこし、雑誌「帝国文学」の発刊にかかわっていく。創刊は明治二八年一月一〇日。創刊号「序詞」は、樗牛の筆になったものである。樗牛が雑誌編集等にかかわったのは初期の頃であるが、「帝国文学会発起人」及び「帝国文学会編集委員」に「文化大学々生 高山林次郎」の名がある。同覧には「○英文学科」として「高等師範学校講師大学院学生 文学士 夏目金之助」の名もある。

樗牛は、第二号に「近松巢林が人生観」（明治二八・二・一〇）を、第四号に「巢林子の女性」（明治二八・四・一〇）を寄せた。筆名は「高齋林良」、高山、齋藤、林次郎、良太にちなんだものであった。

もう一つ、同じ一月に創刊をみた雑誌に、博文館から出版された「太陽」がある。これについて、日本近代文学館編『太陽総目次』（一九九九・一二・二〇 八木書店）は、七期に分ち詳述した。七期の代表者氏名をあげると、次のようになる。〈第一期〉坪谷善四郎時代、〈第二期〉高山林次郎時代、〈第三期〉鳥谷部銃太郎時代、〈第四期〉浮田和民時代、〈第五期〉浅田彦一時代、〈第六期〉長谷川誠也時代、〈第七期〉平林初之輔時代。

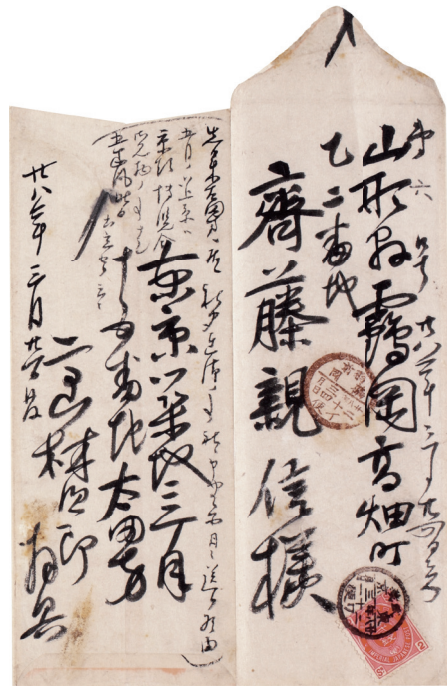
「総合雑誌『太陽』掲載の高山樗牛と姉崎嘲風の文明評論」（岐阜大学国語国文学」25 一九九八・五）で、林正子は次のようにいう。

樗牛と『太陽』の関わりは、明治二八（一八九五）年の創刊年に既に始まっている。樗牛は同郷山形出身の大橋乙羽（一八六九／一九〇一）の推薦で、この年から客員文芸欄主筆となって（後略）

樗牛は創刊の二八年、「戯作的人物と近松巢林子」を第1巻第4号（明治二八・四・五）に掲載するが、健康上の問題が生じていたこともあり、明治二九年九月九日の辞令によって、第二高等学校教授として、仙台に向かうこととなった。本格的な評論活動に入るのには、仙台から東京に帰ってからと言えるかもしれない。

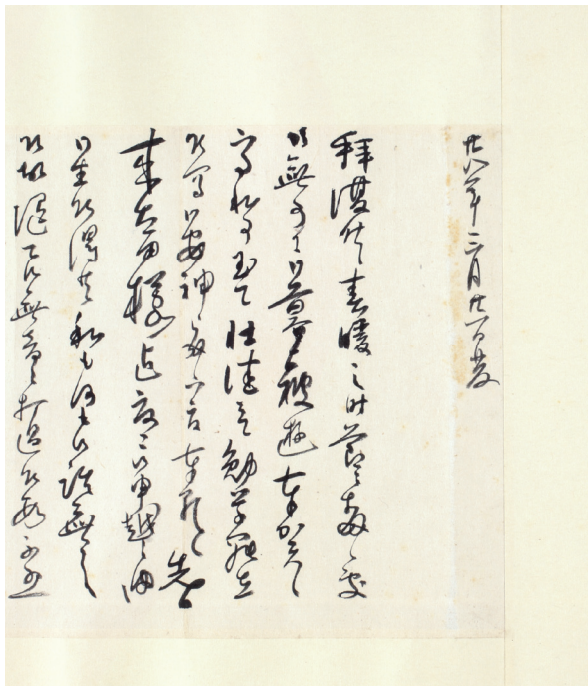
10 明治二八（一八九五）年三月二日

封筒 巻紙 墨書



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕 山形縣靄岡高畑町

乙二番地

齊藤親信様

〔切手〕 式錢

〔消印〕 武蔵／東京／廿八年三月／二十一日／ワ便

羽前／鶴岡／廿八年三月／二十四日／イ便

〔付記〕 才六号廿八年三月廿四日着

〔差出〕 東京築地三丁目

十五番地太田方

高山林太郎

拝具

〔付記〕 先日來太田方へ居候新聞遲滞ノ事社ニ

申由參月ニ送り候由)

五月ノ御上京ハ

京都博覽會

御見物ノ事ナラン

五十嵐昨日出立セリ云々

〔付記〕 廿八年三月廿一日發

〔付記〕 廿八年三月廿一日發

拜復仕候春暖之時節ニ相成候處

御無事に御暮被遊奉賀候

4 崙私事至て壯健ニて勉学罷在

候間御安神被成下度奉願候先日

來太田様⁵適度々御申越之由に

御坐候得共私⁶も何も御話無之

候故随て御無音ニ打過候段不惡

御了承被下度候北海道之兄上様

書簡53-1-3

『全集』既収録。封筒表裏の記載は削除。「東京より／国元の実父へ」とする。

1 後付けの、「三月念一日」と、消印の「廿八年」に拠った。

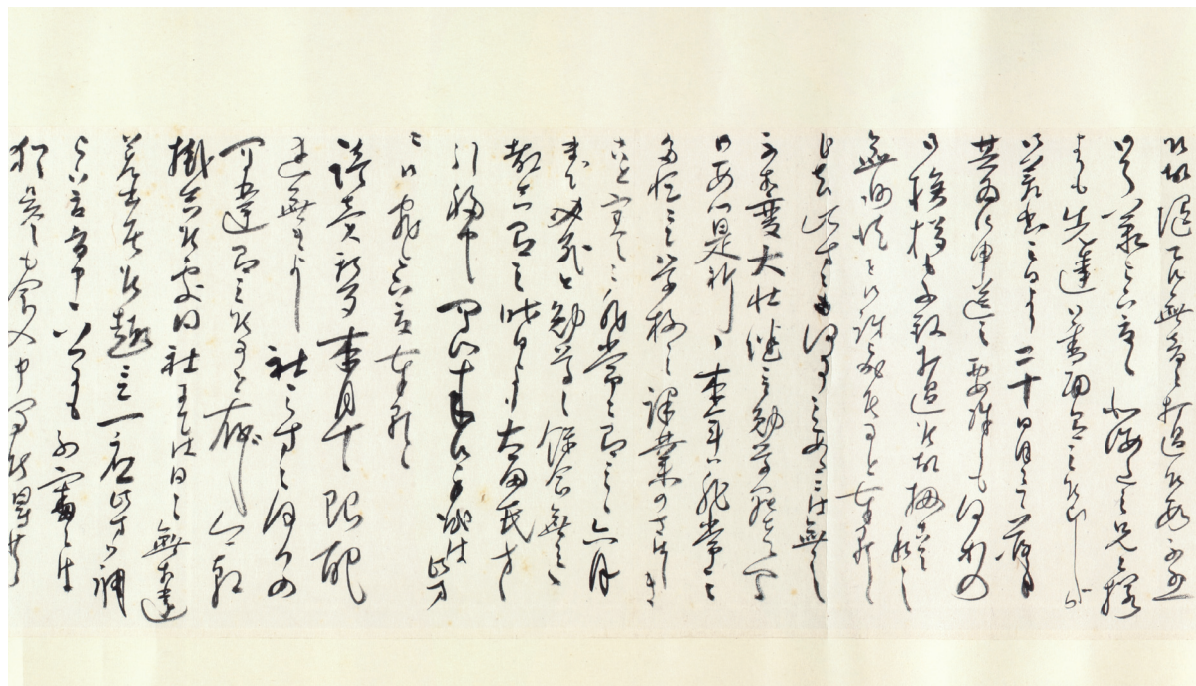
2 「廿八年三月廿一日發」を、『全集』は削除。

3 『全集』は「拝啓」。

4 『全集』は「下面」。

5 「太田様」は、太田資順、樗牛の叔父である。齋藤親良と竹の子で、樗牛の実母芳の弟。樗牛のよき相談相手であった。『明治文学全集』40（前掲）「年譜」には、「三月、新築落成の太田宅に移る」とある。

6 『全集』は「私に」。



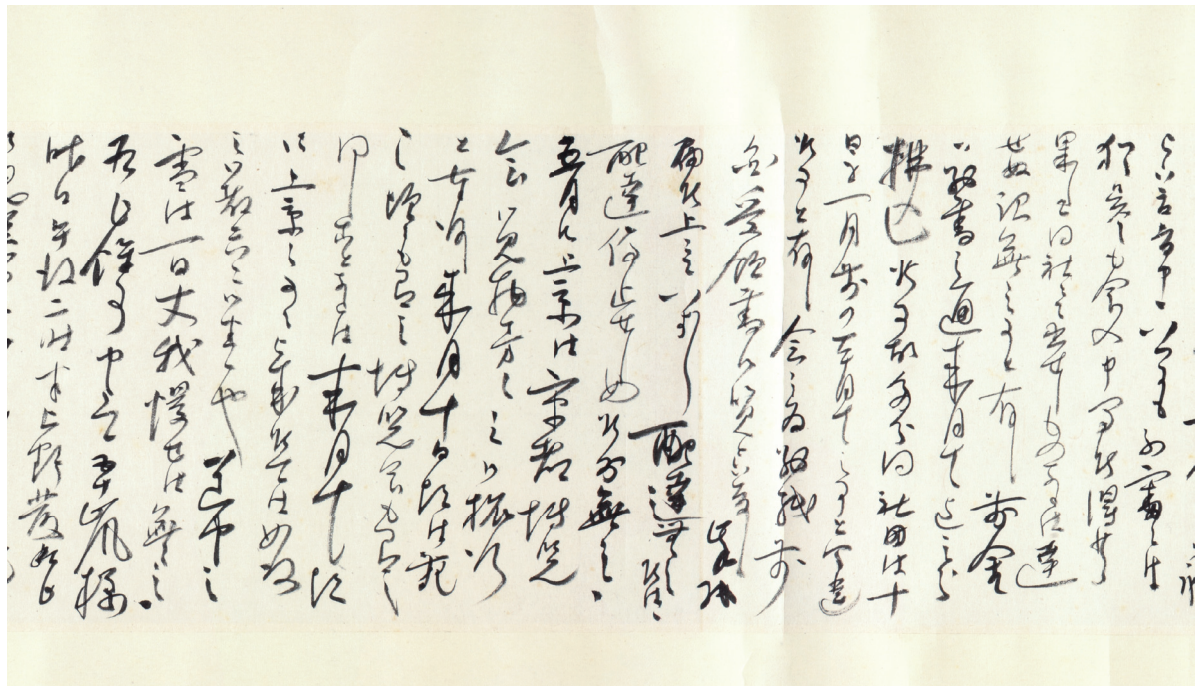
よりも先達御書面有之候ひしが
 御差出之日より二十日目にて落手
 其為御申送之要件も何等の
 御挨拶も不致打過候故扱こそ私之
 無沙汰を御訝被成候事と奉願候
 乍去此方ニ^ニ字様^遣何事^ニある^ニは無之
 不相変大壮健にて勉学罷在候間
 御安心是祈候本年ハ非常之
 多忙^ニて学校之課業のさはしき
 こと寔ニ非常ニ有之候六月
 まで必死と勉学ニ餘念無之候
 都合有之昨日より太田氏方へ
 引移申候間以來御手紙は此方
 ニ御宛被下度奉願候
 読賣新聞本月十日限配
 達無きよし社之方ニ何かの
 間違有之候事と存じ候今朝
 掛合候處同社にては日々無相違
 差出居候趣にて一應此方御調
 被下度旨申候いかにも不審ニ付

7 『全集』は「奉察候」。

8 『全集』は「ありたるには」。

9 『全集』は「非常に多忙にて」。

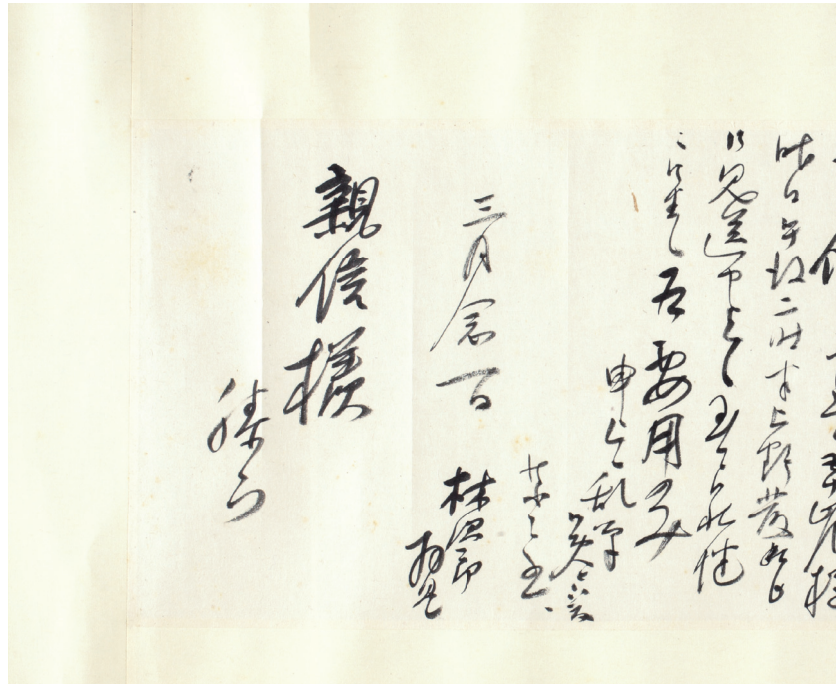
10 『全集』は「実に々々」。



猶呉くも念入申聞候得共
果して同社にて出せしものならは達
せぬ訳無之事と存候前金
ハ別書之通來月十日迄之分
拂込候事故多分同社(二字抹消)は十
日を一月前の奉月十日之事と間違
候事と存候念之為別紙前
金受領書御覽被下度候此手紙
届候上にていよ／＼配達無之候は、
配達停止せしめ候外無之候
五月御上京は京都博覧
会御見物旁々之御旅行
と奉存候來月十日頃は花
之頃ニも有之博覧会も有之
同しことならは來月十日頃
御上京之事ニ被成候ては如何
之御都合ニ御坐候や道中之
雪は一日丈我慢せは無之候
右午餘事申上候五十嵐様
昨日午後二時半上野發私も

11 「は花之頃ニも」から「來月十日頃」の二十六字は『全集』欠落。文面は、五月一〇日頃ではなく、花も博覧会も両方楽しめる來月一〇日頃に上京されるとよろしいのでは、御都合はいかがですかとの気づかいの箇所。京都博覧会は、明治二八年四月一日から開催された。

12 五十嵐修治。齋藤親良、竹の子で、樗牛の実母芳、資順(注5)の弟。修治は五十嵐家を継ぎ、樗牛にとっては叔父にあたる。



御見送申上候至て御壮健
ニ御坐候右要用のみ

申上候乱筆

御免被下度候

恭々不^レ一

15
三月念一日

林次郎 拝具

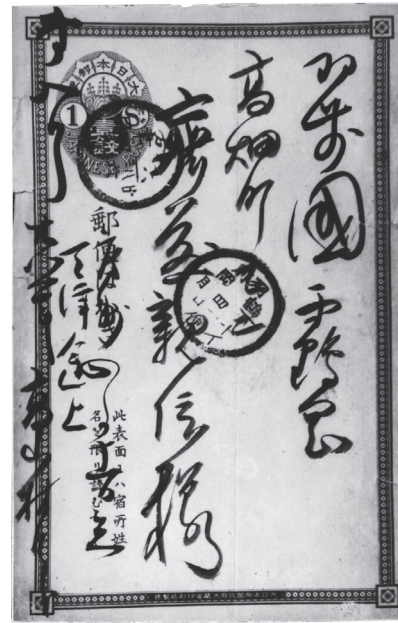
親信様

膝下

15 「三月念一日」から「膝下」まで、『全集』になし。

11 明治二八（一八九五）年四月六日¹

葉書
墨書



葉書表

〔宛名〕

羽前國鶴岡

高畑町乙二

齋藤親信様

〔差出〕

房州

天津途上

高山林次郎

〔消印〕

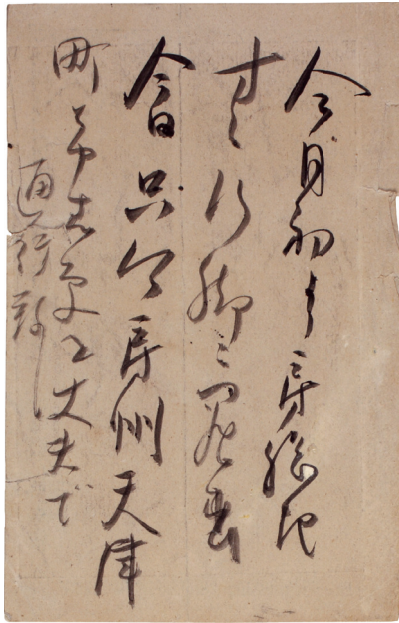
安房／天津／廿八年四月／六日／□□

羽前／鶴岡／□□□四月／十一日／イ便

〔付記〕

四月十一日着

才八号 廿八年



葉書裏

²

今月初より房総地

方ニ行脚ニ罷出

今日只今房州天津

町と申す處を丈夫で

通行致し候

書簡53-4-9

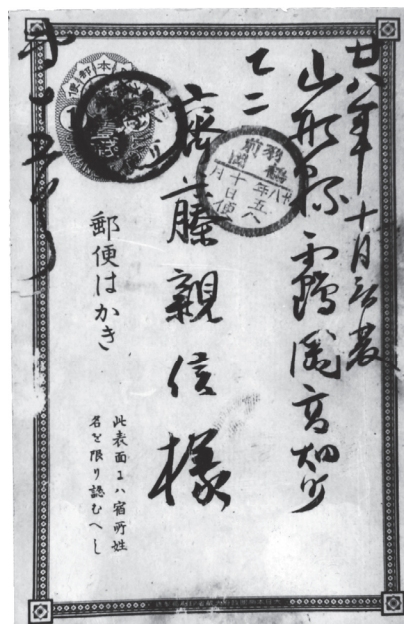
『全集』未収録。

1 消印の「廿八年四月六日」に拠った。なお、養父久平宛葉書『全集』が、ほぼ同様の内容で、日付を「明治二十八年四月六日」とする。

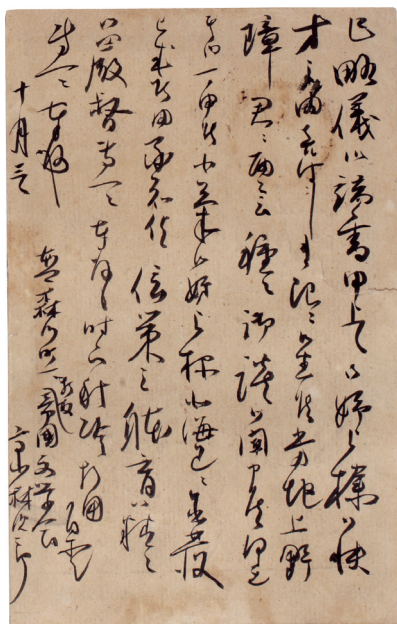
養父宛書簡には、「房州天津町より／国元の養父へ」として、「今月二日より春季休業を幸ひ総房地方をあるき申候、今日只今当地を大丈夫で通行仕候間、一寸御しらせ申上候。」とある。

2 注1の引用により、本葉書「今月初より」は、「今月二日より」であったと推測できる。

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 山形縣鶴岡高畑町

乙二

齊藤親信様

〔消印〕 武蔵／東京本郷／廿八年十月／三日／リ便

羽前／鶴岡／廿八年十月／五日／へ便

〔付記〕 廿八年十月三日發

〔付記〕 才十五号

乍略儀以端書申上候御²姉上様御快

方之由¹はしき限ニ御坐候當地上野

璋君ニ面会種々御談御聞申候何れ

其内可申候小菊御姉上様北海道ニ御出發

被成候由承知仕候信策之⁴躰育ハ精々

御嚴督專一二奉存候時下秋冷折角御自愛

專一二奉存候 本郷森川町一新坂帝國文学會

十月三日

高山林次郎

書簡53-4-10

『全集』既収録。表書を削除し、「東京より／国元の実父へ」と付記する。

1 後付けの「十月三日」と、年は消印の「廿八年」に拠った。

2 御姉上様は清水もと子。二八年四月九日親信宛書状には、「御姉上様の御病状」三不³容易の御模様とある。二九年二月二日実父宛書簡に、「不吉の電音唯今被見」とあり、死亡を知ったもようである。

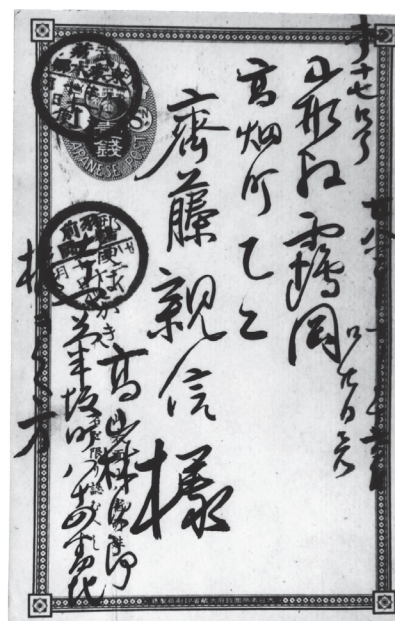
3 「上野璋君ニ面会」何れ其内可申候とある。『高山樗牛資料目録』に実父宛の樗牛書簡要約があり、「上野璋君に見込みを尋ねたところ、一定の見込みがないもののように、氣長に養生するしかないとのことであった。」とある。これが該当するか。

4 小菊は、齋藤親廣の妻。

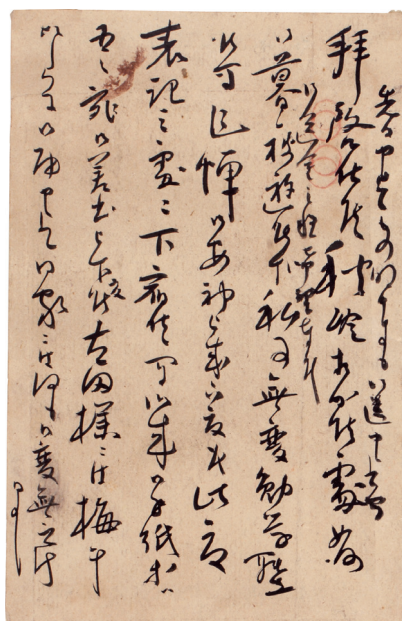
5 信策は、樗牛の実弟。明治一年四月一四日誕生、四二年八月六日に没した。樗牛を尊敬し、仙台の第二高等学校から東京帝國大学に進学した。評論家、筆名「齋藤野の人」である。

6 「本郷森川町」以下「高山林次郎」まで、『全集』では削除。樗牛の差出地が「帝國文学會」の住所になっている点について、同年九月一八日養父宛葉書（『全集』に、「陳者賜チフス病蔓延之恐有之候為、今日より向二週間閉舍相成候に付、其間左記之所に転居仕候。」とある。

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 山形縣靄岡

高畑町乙二

齊藤親信様

〔差出〕 高山林次郎

卒郷菊坂町八十四番地

梶さく方

〔消印〕 武藏／東京本郷／廿八年十月／十七日／ヲ便

羽前／靄岡／廿八年十月／二十日／イ便

〔付記〕 才十七号 廿八年十月十七日付

同 廿日着

先日²申上候もの明日にも御送申上候間

拜啓仕候秋冷相加候處如何

御送金³之程希望奉候

御暮被遊候哉私事無変勉強罷在

候間乍憚御安神被成下度候此度

表記之處ニ下宿仕候間以來御手紙等ハ

右ニ宛御差出被下度候太田様ニは梅干

たしかに御届申上候同家ニは何も御変無之候

早々

書簡53-4-11

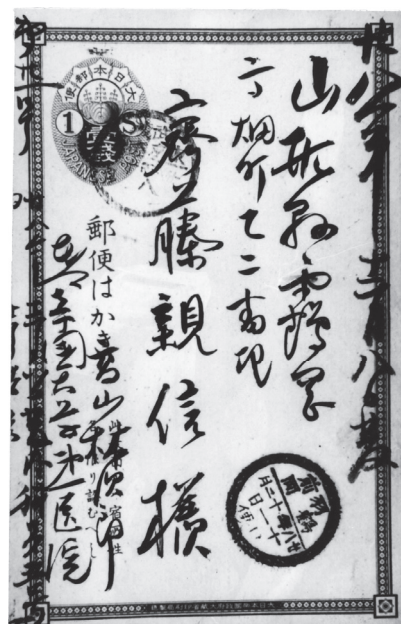
『全集』未収録。

1 消印に拠った。

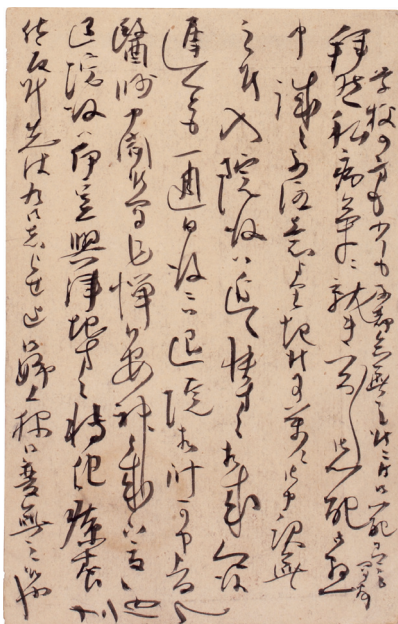
2 「先日申上候」の行と、「御送金」の行は、行間に記されたもの。結語「早々」の次に読まれる行である。

3 「御送金」の「送」と「金」の右脇に、朱で輪違いのように「〇」を重ねて押してある。

葉書 墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 山形縣鶴岡
高畑町乙二番地
齊藤親信様
高山林次郎
本郷帝國大学才²一医院
内科第三号
〔消印〕 （不明） 八日
羽前／鶴岡／廿八年十二月／十一日／口便
〔付記〕 廿八年十二月八日發
〔付記〕 才廿一号 廿八年十二月八日發
（印字不明）

³学校の方も少しも不都合無之候ニ付御心配
有之間敷候
⁴拜啓私病氣ニ就きいろ／＼御心配御懸
申誠ニ不注意より起候事萬々御申訳無
之候入院後ハ追々快方ニ相成今後
遅くとも一週日後ニハ退院相叶可申旨
醫師申聞候間乍憚御安神被成下度候
退院後ハ伊豆興津地方ニ轉地療養⁵
仕度候先は右御しらせ迄御姉上様御變無之候や⁶

書簡53-4-12
『全集』既収録。葉書表の記述
削除。「帝國大学附属病院より／
国元の実父へ」と付記。

1 葉書裏下部空欄の「十二月八
日」と、消印の「廿八年」に拠つ
た。

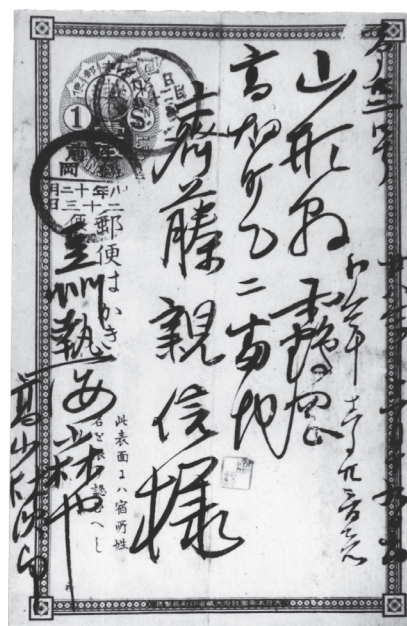
2 第一医院は、東京大学医学部
附属病院の旧称。室番号は「二三」
か「五」か。

3 『全集』は「学校の方は」。

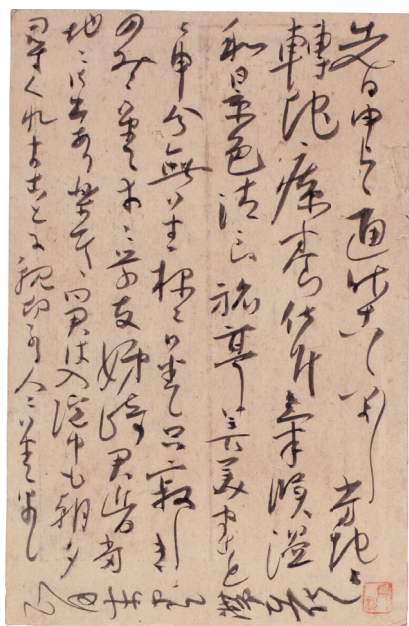
4 「私病氣に就き」とあるが、
明治二八年一月一九日、太田資
順の妻元恵に宛てた書状（『全集』
に拠ると「去十日ごろより風邪の
氣味」、「学校もやすみがち」であ
ったが、「十六日は文科大学生一
同の遠足会」、「委員の役にて」同
行した。しかし無理がたたり「今日
は」学校に医に見てもらひに
まゐり候」「多分持病の氣管支カ
タルならんと存候」とあるように
快復が遅れ、一月二七日の実父
宛葉書（『全集』）に、「入院致候」
と告げ、「遅くとも来月五日ごろ
までには全治のつもり」と記して
いる。

5 「伊豆興津地方ニ轉地療養」
したいとあるが、次に掲げる本学
所蔵葉書によると、退院後向かつ
たのは、熱海である。

6 「十二月八日」は、葉書下の
空白部に記されている。『全集』
はこの日付を削除。



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 山形縣靄岡
高畑町乙二番地
□（朱角印）
齊藤親信様
豆州熱海小林や
高山林次郎
〔差出〕
〔消印〕
（不明） □年十二月/□□日/
羽前/靄岡/□八年十二月/二十三日/□便
〔付記〕 第廿二号 廿八年十二月十九日出
同年十二月廿三日着

先日申上候通昨³十八日いよく當地ニ
轉地療養仕候氣候溫
和景色清良旅亭善美まこと
ニ申分無御坐様ニ御坐候只寂しき
のみニ御坐候幸ニ学友姉崎君近日當
地ニ御出あり樂居候同君は入院中も朝夕
尋くれまことに親切なる人ニ御坐候早々
□（朱角印）

書簡53-4-13
増補縮刷『樗牛全集』第六卷（前掲）と、『全集』に収録。双方とも葉書表の記載は削除。「伊豆熱海より/国元の実父へ」とある。

1 葉書には後付けの日付がなく、差出時の消印は、「十二月」のみが明らかである。ただ、文中に、「昨十八日」とあるから、日付は一九日と考えてよからう。年は、消印の末尾が八の年。「轉地療養」の内容からして、二八年一月二十九日の消息と見てよいか。『全集』も同日の日付。

2 差出人住所には、「小林や」とあるが、『全集』註は、「宿は「ふるや」とした。『明治文学全集』40（前掲）「年譜」も、「十八日に「ふるや」に」とし『高山樗牛資料目録』からは樗牛が「小林屋」から出した葉書・封筒が残されていることが知られる。滞在先は「ふるや」ではなく、「小林屋」であったと見てよさそうである。

3 「轉地」の日を、明治二八年一月一八日と記している。滞在先は、この葉書には「小林や」とある。

4 姉崎正治（嘲風）。明治六年七月二五日、京都生まれ。第三高等中学校を経て、二六年、帝国大学文科大学哲学科に入学。寮では高山樗牛と同室であり、終生の友となった。樗牛は「わがそでの記」（『反省雑誌』明治三〇・八・一夏期附録）に、見舞ってくれた姉崎を描いている。

5 『全集』は「尋ねくれ」。

【補注5】

樗牛の退院が遅れたのには、事情があった。『全集』収録書簡に拠ると、明治二八年二月一二日、樗牛は叔父太田（資順）に二度葉書を出している。そこには、「ベルツ先生」の診察を受け、「イマスコシ在院可然」と言われたと書かれている。

酒井シヅ「エルウィン・ベルツのこと」（岩波文庫『ベルツの日記（上）』一九七九・二・一六）に拠ると、エルウィン・ベルツは一八四九年一月一三日、南ドイツに生まれ、「日本政府から」の「招聘」によって、明治九（一八七六）年東京医学校に着任。同校は翌一〇年改称して東京大学医学部となるが、樗牛が診察を受けたのは、このベルツである。

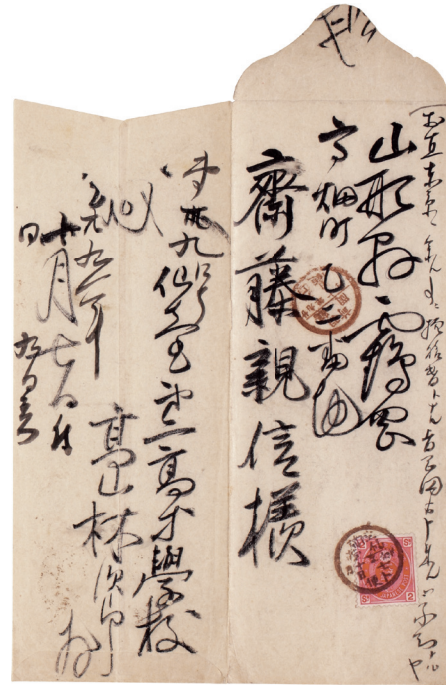
明治二八年二月一三日、実父宛の書状（『全集』）には、

医師の診断によれば、左肺炎に少々異状有之候に付、此際無理するはよろしからず、東京は空気寒冷に付、房州、豆州辺の温暖なる地方に、正月一杯も転地旅行可然旨申聞候。肺炎と云へば、たとひ軽少なながらも、ゆるかせに不相成処にて候故、少々不便不都合は不得已、一切抛棄して、全く医師の命令を遵奉仕候決心に有之候。

と記されている。さらに同書状には「退院は両三日」とあるが、本葉書に拠れば、一八日に熱海に到着している。滞在は二九年正月後も続き、二月一八日実父宛書簡（『全集』）には、同月「十四日熱海出発、十五日着京、十六日直に大学病院に赴き」診察を請うと、「肺炎は依然としてわるし」とある。

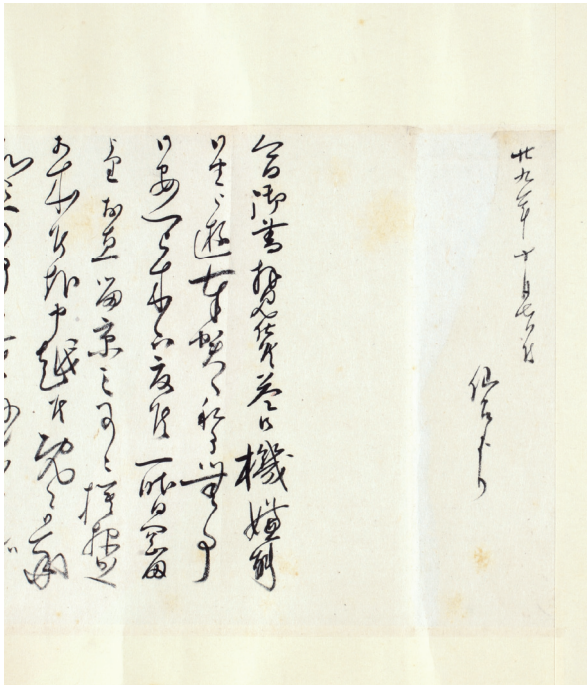
17 明治二九（一八九六）年一〇月七日

封筒 卷紙 墨書



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕

山形縣鶴岡

高畑町乙二番地

齋藤親信様

〔切手〕

式錢

〔消印〕

陸前／仙臺／廿〇年十月／七日／ト便

羽前／鶴岡／廿九年十月／九日／ロ便

〔付記〕

（お直東京へ参ル事ニ控給旨トナル旨
岡田方申来ルご承知ナルヤ

〔差出〕

仙臺才二高等學校

〔目付〕

高山林次郎様

〔付記〕

十月七日

〔付記〕

才卅九号

〔付記〕

廿九年

〔付記〕

（十月七日）付

〔付記〕

同 九日着

〔付記〕

廿九年十月七日付

〔付記〕

仙台より

〔付記〕

今日御書拝見仕候益御機嫌能

〔付記〕

御坐被遊奉賀候私事無事

〔付記〕

御安心被成下度候一昨日岡田

〔付記〕

よりお直留京之事ニ模様かへ

〔付記〕

相成候赴申越候既ニ御承

〔付記〕

直留京」は懷妊のためか。

〔付記〕

簡（『全集』）に「牛が直子の分婉

〔付記〕

について案ずる箇所がある。「お

〔付記〕

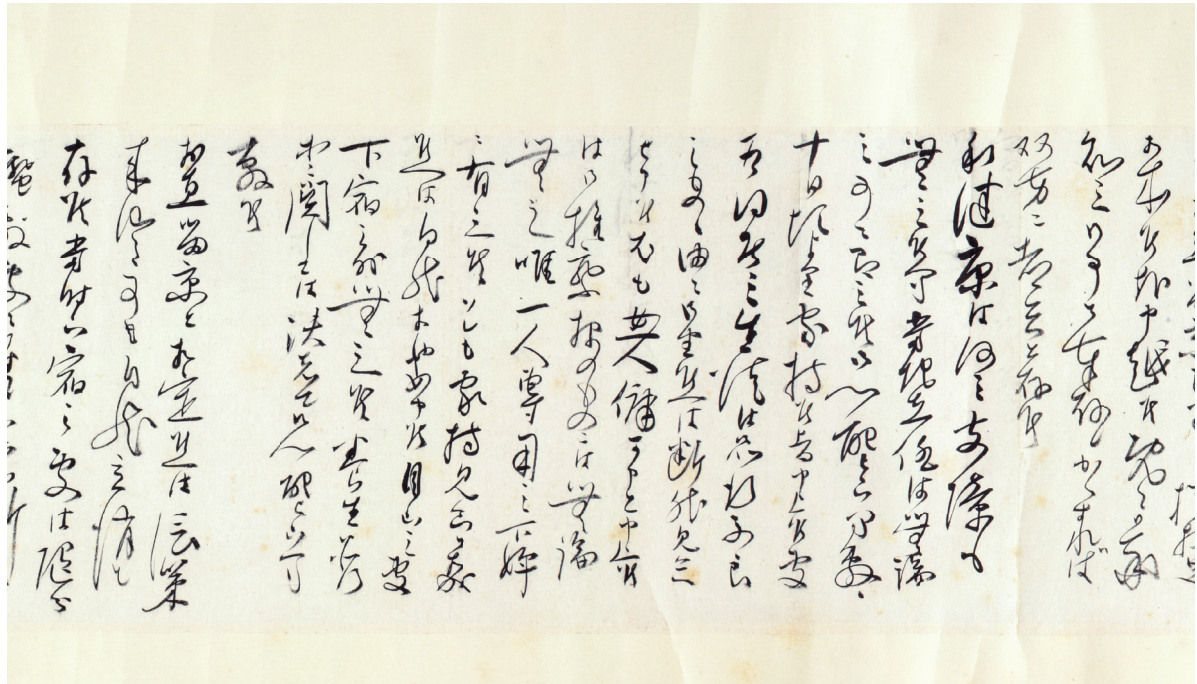
直留京」は懷妊のためか。

書簡53-1-5

『全集』未収録。

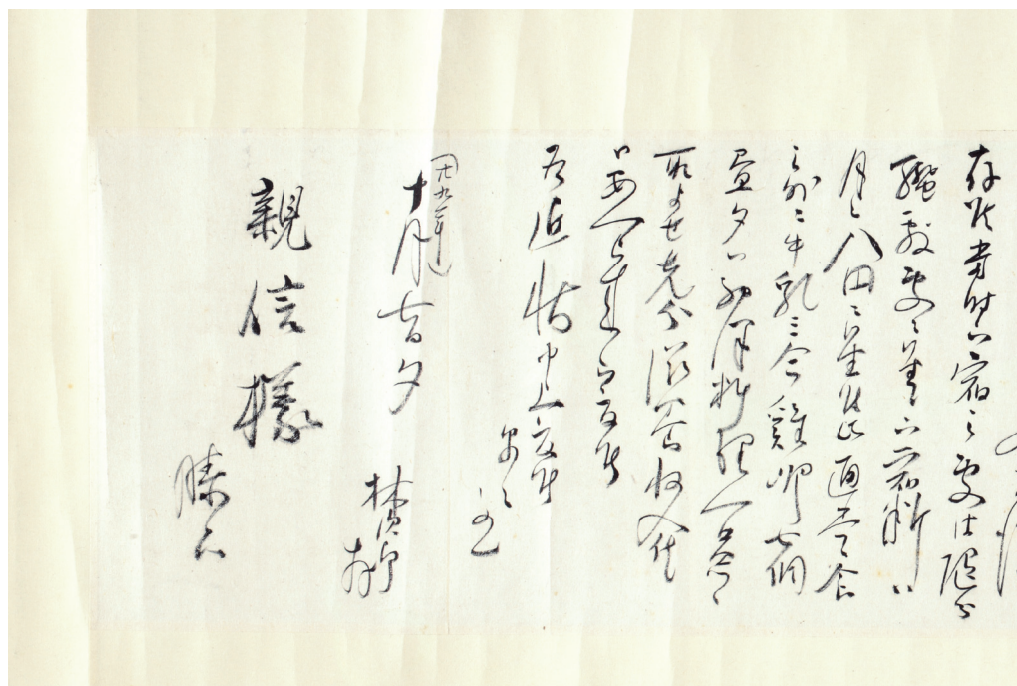
1 後付けに、「十月七日」とある。
年は、仙台の消印は不明瞭だが、
鶴岡消印に「廿九年」とあり、そ
れに拠った。

2 明治三〇年二月七日実父宛書
簡（『全集』）に「牛が直子の分婉
について案ずる箇所がある。「お
直留京」は懷妊のためか。



知之御事と奉存候かくすれば
双方ニ都合と存候
私健康は何之支障も
無之候間當地在住は無論
之事ニ有之候御心配被下間敷候
十日頃より家持候旨申上候處
右同居之生徒は品行不良
之もの、由ニ御坐候へは断然見合
せ申候尤も女一人傭可申と申上候
は御推察様のものニは無論
無之唯一人専用之下婢
ニ有之候ソレも家持見合セ相成
候へは白紙相やめ申候目下之處
下宿之外無之候養生品行
等ニ関しては決して御心配被下間
敷候
お直留京と相定候へは信策
來仙之事も白紙立消と
存候當時下宿之處は随分

3 家を借り、女中をおく件、白紙としているが、現実にはそれを実行し、満足を得たという逸話がある。『文豪高山樗牛』（前掲）に、「樗牛は、臍の緒切つて始めて一家を持った、と大得意であつた。」とある。しかし、家族は、女中とポインター種の仔犬一匹。一時期は樗牛と同僚の不破信一郎も同居していたという。
右、同居の件は明治二九年一月二日養父宛書簡（『全集』）に記されている。



騷敷處ニ御坐候下宿料ハ
月々八円ニ御坐候此通壹食
之外ニ牛乳三合雞卵七個
昼夕ハ西洋料理一品ツ、
取よせ充分滋養收入仕候
御安心被成下度候
右近状申上度候

早々
不一

(廿九年)

十月七日夕

林次郎拝

親信様

膝下

(元九廿九年)

十月七日夕

林次郎

親信様

膝下

【補注6】

樗牛は、病を得、療養の日々を送っていたが、明治二九年七月一〇日、帝国大学を卒業した。転地や旅行を心懸け、健康回復につとめていた中で一つの決断をすることになる。仙台の第二高等学校教授就任である。

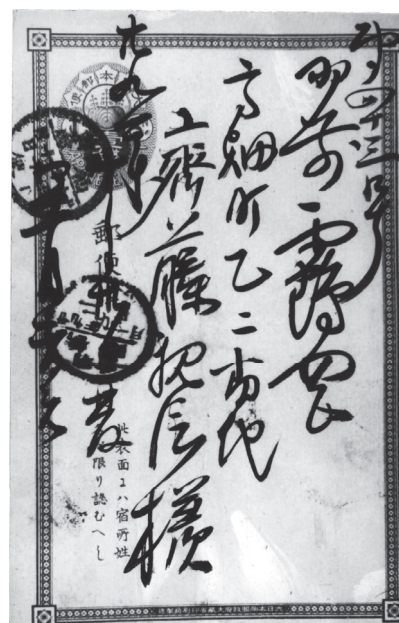
辞令は九月九日に出され、書き写したものが、『全集』に収録されている。仙台二高（旧称、第二高等中学校）は樗牛の出身校であったが、一高を落第した樗牛にとって、二高には心満たされず、校長や教師学生に、辛辣な言を残しているから、教授となって帰った二高も、樗牛の心を充足させる所とはなりえなかったのかも知れない。明治二九年九月二三日の兄親廣に宛てた書簡（『全集』）は、当時の樗牛の心底を語っている。

私事も其後異状無之、追々健康回復之運に到可申候間、幸に御安心被成下度候。此度は偶然之ことより当仙台に参候事に相成、昨今は無余儀村夫子となりすまし申候。是れ雄心之沮喪したるには無之、保養かた／＼の暫時之雌伏と御諒察被下度候。在京之友人中には、地方行を切にとゞめくれ候ものも有之候得共、事定候後に候へば、何ともいたし方無之、遂に今日の仕ぎと相成り、自分ながら余り感心仕らず候。唯小弟刻下の大事は、健康を回復するにあれば、志ばらく閑地につきて保養可然と、是も一原因に有之候。何れ健康十分回復之後は、無論大学教授を目懸けて再挙すべき決心に有之候。

健康の回復が第一、今は雌伏期として、大学教授をめざすというのである。目標は、大学教授。樗牛の願いとして銘記されてよい。

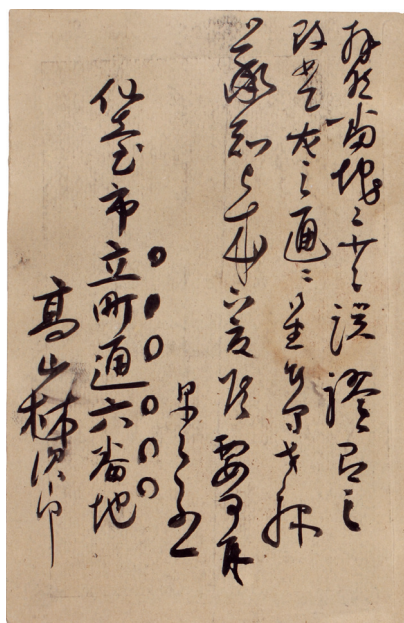
18 明治¹二九（一八九六）年一〇月三〇日

葉書
墨書



葉書表

〔宛先〕 羽前鶴岡
高畑町乙二番地
齊藤親信様
〔日付〕 十月卅日
〔消印〕 陸前／仙臺／廿九年十月／三十日／ト便
羽前／鶴岡／廿九年十一月／二日／□□
〔付記〕 才四十三号
〔付記〕 廿九年
（十月卅日の下に） 發
同十一月二日着



葉書裏

拝啓番地ニ少々誤謬有之
改めて左之通ニ御坐候間左様
御承知被成下度候要事耳
早々不一
仙臺市立町通六番地
高山林次郎

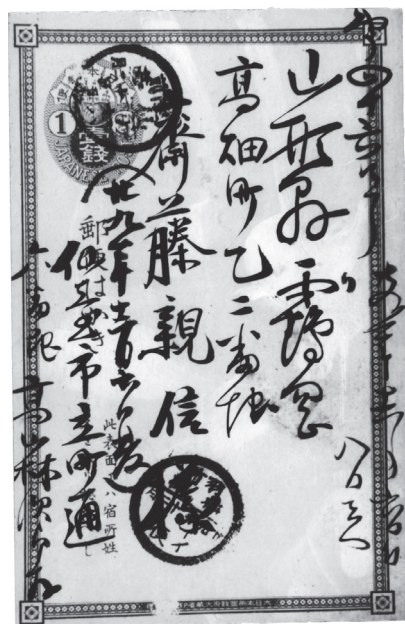
書簡53-4-15

『全集』未収録。

1 仙臺の消印に拠った。

19 明治二九（一八九六）年十二月六日

葉書 墨書



葉書表

〔宛先〕 山形縣鶴岡

高畑町乙二番地

齋藤親信様

〔差出〕 仙臺市立町通

六番地

高山林次郎様

〔消印〕 陸前/仙合/□□年十二月/六日/ハ□

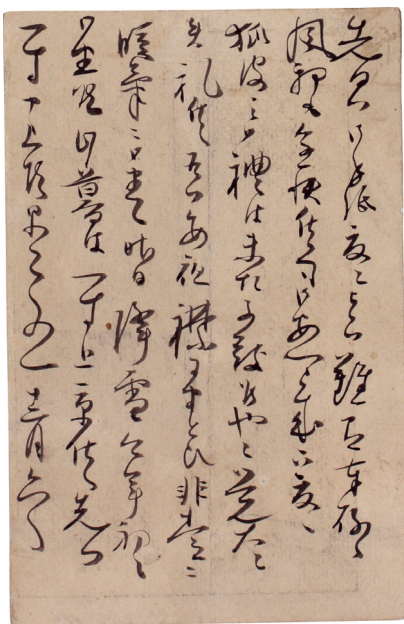
羽前/□□/廿九年十二月/□□/イ便

〔付記〕 才四十六号廿九年十二月六日付

八日着

〔付記〕 (廿九年十二月六日發)

葉書裏



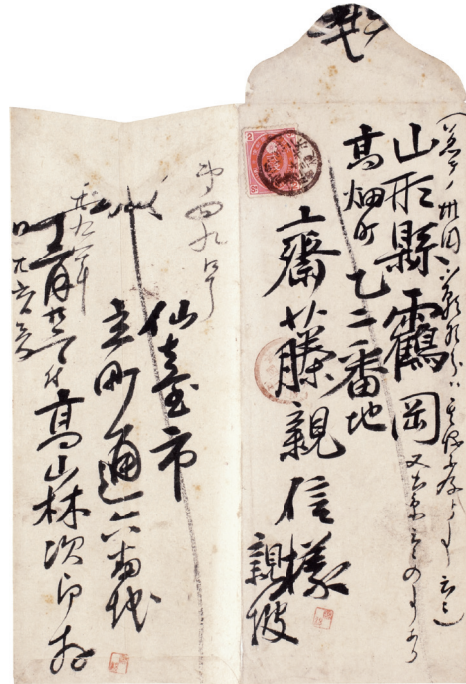
先日ハ御手紙度々被下難有奉存候
風邪も全快仕候間御安心被成下度候
狐皮之御禮は未だ不致候やニ覺大ニ
失礼仕候右ハ毎夜襟にまとひ非常ニ
暖氣ニ御坐候昨日降雪今年初ニ
御坐候此暮は一寸上京仕候先ハ
一寸申上候早々不一 十二月六日

書簡53-4-16
『全集』既収録。葉書表の記載は削除。「仙合より/国元の実父へ」とする。

1 後付けの「十二月六日」と、消印「廿九年」に拠った。「十二月六日」を、『全集』は削除。

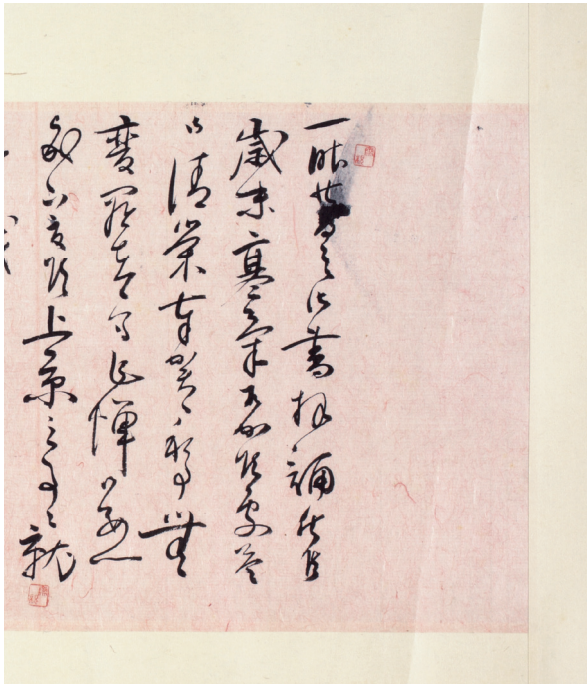
20 明治二九（一八九六）年十二月二日¹

封筒 卷紙 墨書



封筒表

封筒裏



卷紙

〔宛先〕

山形縣鶴岡

高畑町乙二番地

齋藤親信様 □（朱角印）

親披

〔切手〕

式錢

〔消印〕

陸前／仙臺／廿九年十二月／二十三日／ホ便

（印薄、不明）

〔付記〕

（急テノ卅〇御頭候分ハ其儀不及トノ事云々）

又出京云々の事あり

〔差出〕

仙臺市

立町通六番地

□（朱角印）

高山林次郎拜

〔目付〕

十二月廿二日

〔付記〕

才四九号

〔付記〕

廿九年

（十二月廿二日）付

同 廿六日 着

□（朱角印）

一昨廿（二字抹消）日之御書拝誦仕候

歳末寒氣相加候處益

御清栄奉賀候私事無

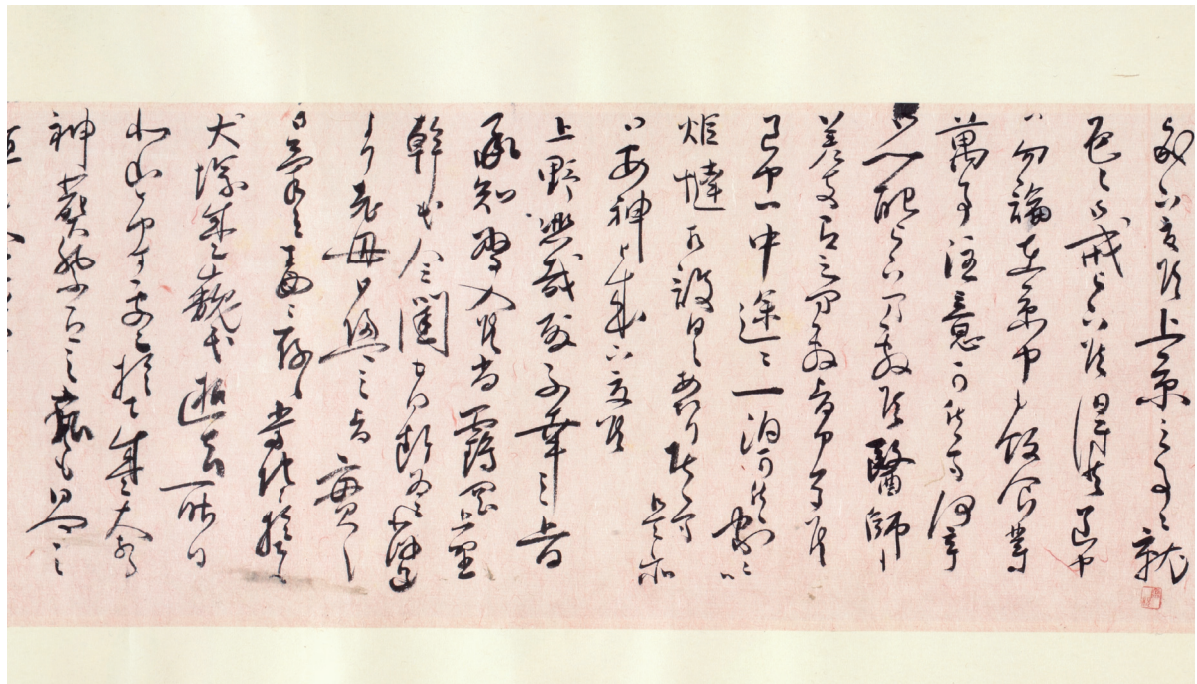
変罷在候間乍憚御安心

被成下度候上京之事ニ就 □（朱角印）

書簡53-2-1

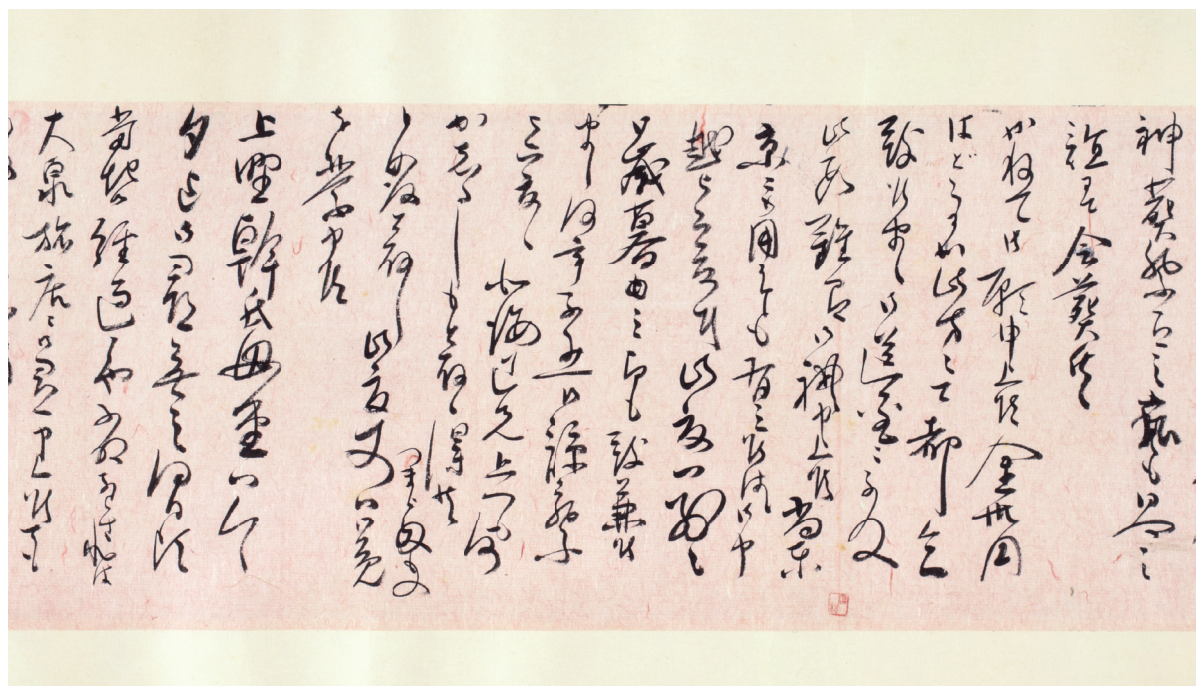
『全集』既収録。封筒表裏の記載は削除。「仙台より／国元の実父へ」とする。

1 書簡後付けの、「明治廿九年十二月廿二日」に拠った。



色く御戒被下候得共道中
ハ勿論在京中も飯食等
萬事注意可仕候間何卒
御心配被下間敷候醫師も
差支有之間敷旨申居候
道中ハ中途ニ一泊可仕候家ニハ
炬燵相設日くあたり居候間是亦
御安神被成下度候
上野興哉殿不幸之旨
承知驚入候尚靄岡上堅
幹氏令聞も同断為ニ北海道
より老母御歸郷之旨實に
御氣之毒ニ存候當地ニ於ても
犬塚盛巍氏逝去一昨日
北山と申す處ニ於て盛大なる
神葬祭有之（字抹消）私も同郷之

2 犬塚盛巍（いぬづかもりたか）。
明治二九年一二月一日没。庄内藩
士、仙台控訴院検事長。



誼にて会葬仕候
かねて御願申上候金卅円
はどうにか此方にて都合
致候まゝ御送金ニ不及

□（朱角印）

此段難有御禮申上候尚東
京ニ御用にても有之候は、御申

越被下度候此度ハ別ニ

御歳暮（二字抹消）之印も致兼候

まゝ何卒不惡御諒察

被下度候北海道兄上へも何

かするしもと存候得共つまらぬもの

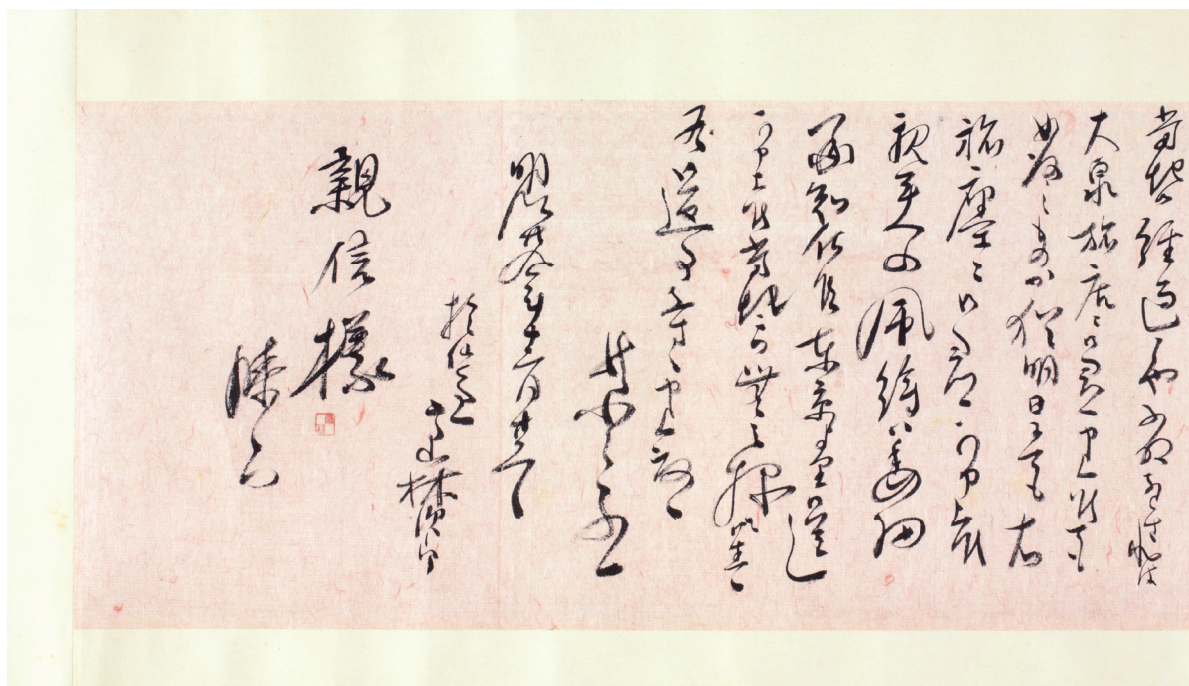
も如何と存し此度丈ハ御免

を蒙申候

上堅幹氏母堂ハ今

夕迄御尋無之何日頃

當地御經過ニや不明ならされは



大泉旅店ニ御尋申上候ても
如何之ものか猶明日にても右

旅塵ニ御尋可申上候

親平³への風繪ハ委細

承知仕候東京より御送

可申上候當地ニハ無之様ニ御坐候

右御返事旁、申上度候

恭々不一

明治廿九年十二月廿二日

於仙臺

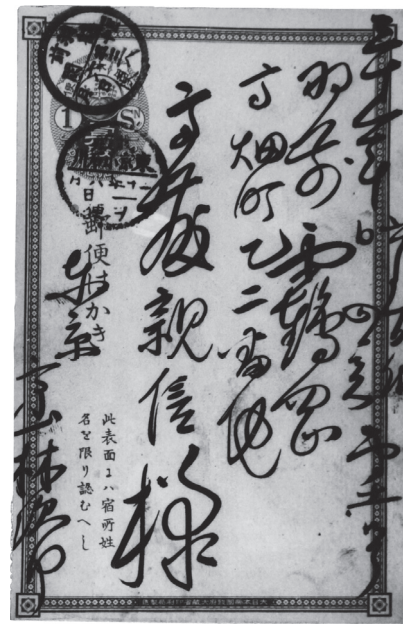
高山林次郎

親信様 □ (朱角印)

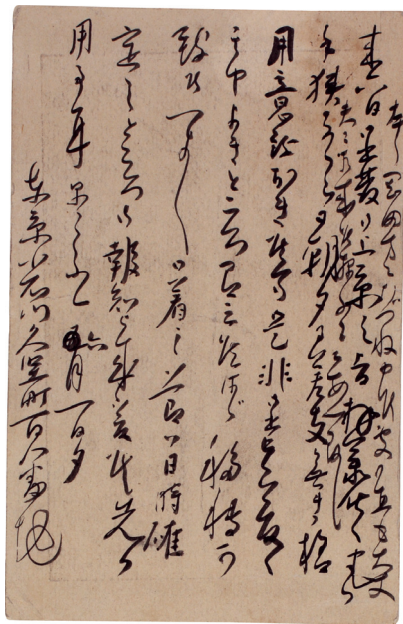
膝下

3 親平は齋藤親信の第九子。

4 「明治廿九年」から「膝下」まで、『全集』は削除。



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 羽前鶴岡
高畑町乙二番地
齊藤親信様
東京
〔差出〕 高山林次郎
武藏／東京小石川／□十年六月／一日／ヲ便
羽前／鶴岡／三十年六月／三日／へ便
〔消印〕 三十年六月一日付 才十一号
〔付記〕 同 四日着

本日岡田方ニたづね申候處御直も大丈
來六日御出發御上京之旨拝承仕候宅ハ
夫ニ相成候様子ニテ安心致候
手狭なからに朝夕に差支無き様
用意致おき候間是非御出被下度候
其中よきところ有之候はゞ移轉可
致候いよ／＼御着之節ハ日時確
定之ところ御報知被成下度候先ハ
用事耳早々不一 六⁵（五）を二字訂正 月一日夕
東京小石川久堅町百八番地

書簡53-4-17
『全集』既収録。葉書表の記載は削除。「東京より／国元の実父へ」とする。

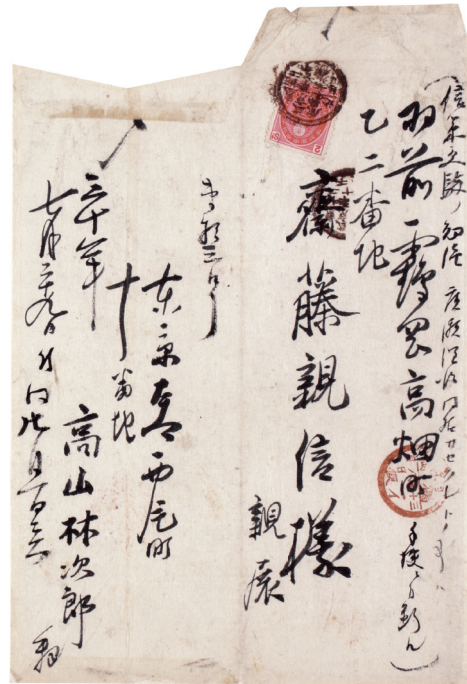
1 後付けの「六月一日」と、消印の「三十年」に拠った。

2 「本日岡田」の行と「夫ニ相成」の行は、文末に置かれる文だが、端の空きや、次の行間を利用して書き入れたもの。

3 『全集』は「相」。

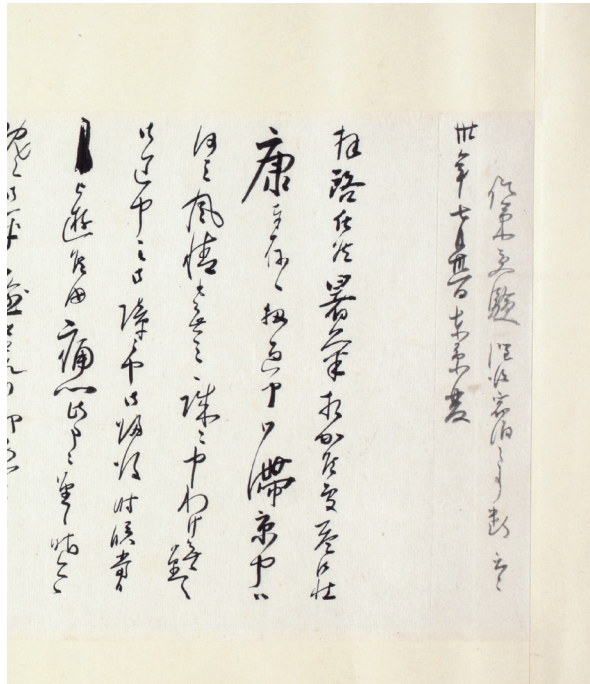
4 「宅ハ」以下の文章と、「方」書きのない住所から見ても、久堅町の住まいは下宿ではなく、借家住まいであったか。

5 後付け日付以下、「百八番地」まで、『全集』は削除。



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕 羽前鶴岡高畑町

乙二番地

齋藤親信様

親展

〔切手〕 式錢

〔消印〕 武蔵／東京駒込／三十年七月二十九日／□便

羽前／鶴岡／三十年八月一日／イ便

〔付記〕 (信策受驗ノ勉強 廣瀬潤治同居サセク

レトノ事ハ手狭ニ付断ル)

〔差出〕 東京本郷西片町

十番地

高山林次郎

拜

〔日付〕 七月二十九日

〔付記〕 才拾三号

〔付記〕 三十年

(七月二十九日の下) 付同八月一日着

〔付記〕 信策受驗 潤治宿泊之事断 二云々

3 卅年七月卅一日東京發

〔付記〕 拜啓仕候暑氣相加候慶益御壯

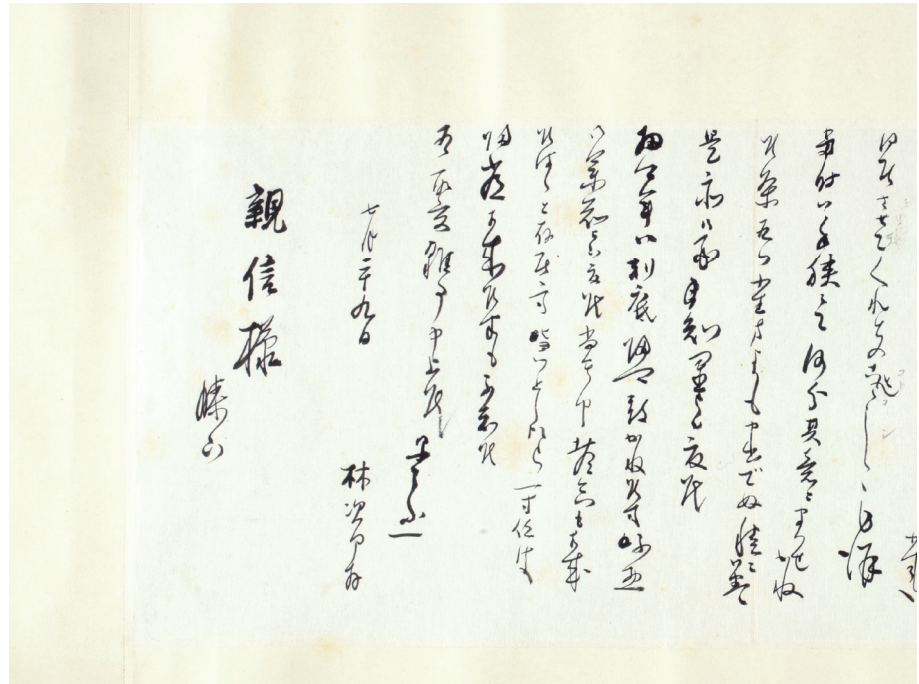
康奉存候扱過中御滞京中ハ

何之風情も無之誠ニ申わけ無御坐候

御道中之御障ニヤ御歸後時候當リ

〔文字抹消〕 被遊候由痛心此事ニ御坐候昨今

信策、如素志才二高等學校特別
 試驗相受度決^{ニ字棟通}心不可動ニ付強て其意
 二忤ふは不可と存し其事ニ致しおき候間
 御承知置被下度候試驗ハ九月一日
 よりなれば八月末迄ハ小宅ニ於テ準備
 勉強之事ニ為致居候帰国旅費云々
 のことは随て無用ニ付御差ひかへ被下度候
 信策事ニ附ては色々餘計之御心配
 (二字棟通) 相懸候も恐入候へは受験式円及び
 仙臺迄の旅費御送被下候は、其餘ハ如何
 ニもいたし候間左様御含被下度候私へ
 別に御心付等は御無用ニ相願度候
 廣瀬潤治殿事昨夜同人親より書
 面有之意味極めて曖昧ながら小宅へ
 同居させてくれとのことらしく候乍併

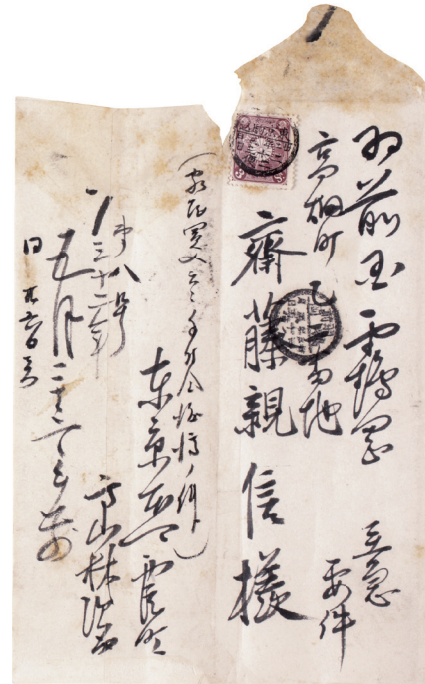


當時ハ手狭ニて何分其意ニまかせかね
 候条右ハ小生方よりも申出でぬ積ニ御坐候
 是亦御承（二字抹消）知置被下度候
 扨今年ハ到底帰郷致かね候間不（二字訂正）悪
 御承知被下度候尚其中都合も相成
 候はゝと存居候間ヒ（二字訂正）ヨツとしたら一寸位は
 帰省相成候半も不知候
 右取交雑事申上候 早々不一
 七月二十九日 林次郎拜
 親信様
 膝下

5 「七月二十九日」から「膝下」
 まで、『全集』は削除。

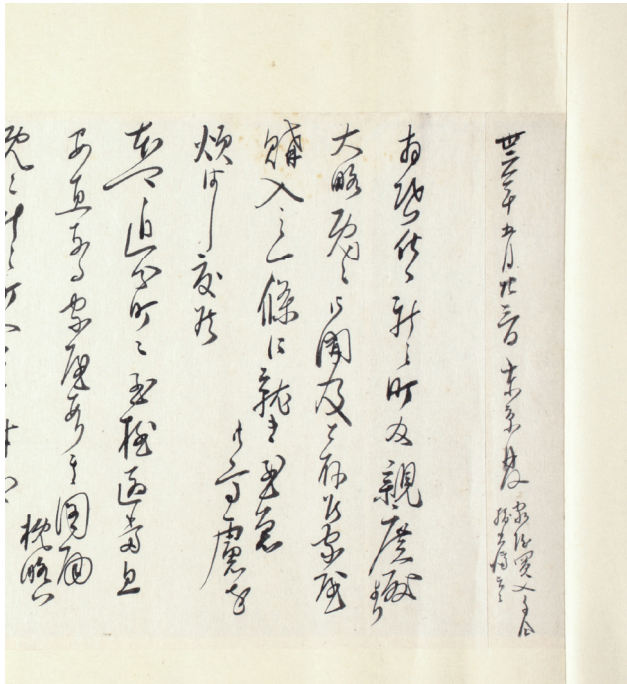
23
明治三二（一八九九）年五月二三日

封筒 卷紙 墨書



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕

羽前国鶴岡

至急

高畑町乙二番地

要件

齋藤親信様

〔切手〕

参銭

〔消印〕

東京駒込ノ卅二年五月ノ二十三日ノ二便

〔差出〕

羽前ノ鶴岡ノ卅二年五月ノ二十五日ノへ便

〔目付〕

東京本郷西片町

〔付記〕

高山林次郎

〔付記〕

五月二十三日午前

〔付記〕

（家屋買入云々手付金渡済ノ件）

〔付記〕

才八号

〔付記〕

三十二年
同 廿六日着

〔付記〕 卅二年五月廿三日東京發

家屋買入手金
指出済云々

拝啓仕候新之町及親廣殿より

大略既ニ御聞及と存候家屋

購入之一條に就き至急御高慮を

煩はし度候

本郷追分町ニ至極適當且

安直なる家屋あり其圖面

概略ハ

書簡53-2-3

『全集』既収録。封筒表裏の記載は削除。「東京より／国元の実父へ」とする。

1 後付けの「五月二十三日」と、消印の「卅二年」に拠った。

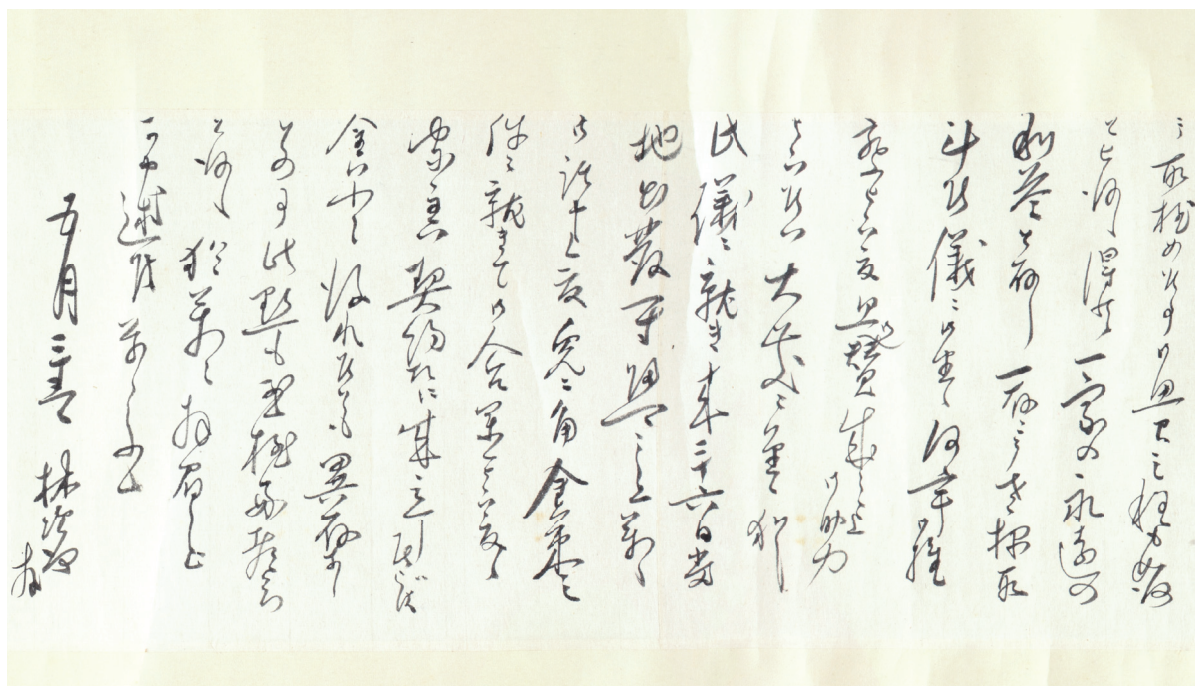
2 明治三二年四月一日、郵便料金が値上げとなり、書状は四匁ごとに三銭、葉書は一枚一銭五厘となった。

3 「卅二年」から「云々」まで、『全集』は削除。

4 「新士町」（あたらしまち）は、養家高山家の住まいのある町。「新士町」で高山家（あるいは久平）をさしている。『全集』に収録された書簡は「新士町」と翻刻されているが、本学所蔵の自筆書簡は「土」、「之」あるいは「シ」が用いられている。『日本歴史地名大系第六巻 山形県の地名』（一九九〇・二・二六 平凡社）は「新シ町」の項目を設け「明治一三年（一八八〇）新シ町、漆畑・小舞台が合併、新士町と改称」とする。

庭園等ハ凡て形を成
し且物置湯殿井戸等
至極都合よきこと
一 如是家ハ再ひ見ること一寸
困難なるべきこと
右家ハ少く古しされども住
居ニ(二字抹消) 毫も差支なきのみならず
少しく手入すれば非常ニ立
派なるべしと被存候地代ハ月四円
つゝ地主と堅固なる契約あり
右家屋ハ兩三日前より望人
二人あり一人は大学の先生ニテ元
良勇次郎と申す人に御坐候何れも
至急取極め度き由にて笹川氏
(二字抹消) 昨夜被(二字抹消) 参此際断然
可否之決心あるへしとて旦購
入の利を勧められ候私も元
末末々の為利益ある家と確

8 元良勇次郎(もとらゆうじろう)
杉田勇次郎。安政五年十一月一日
生まれ、大正元年十二月十三日没。
結婚して、元良となる。



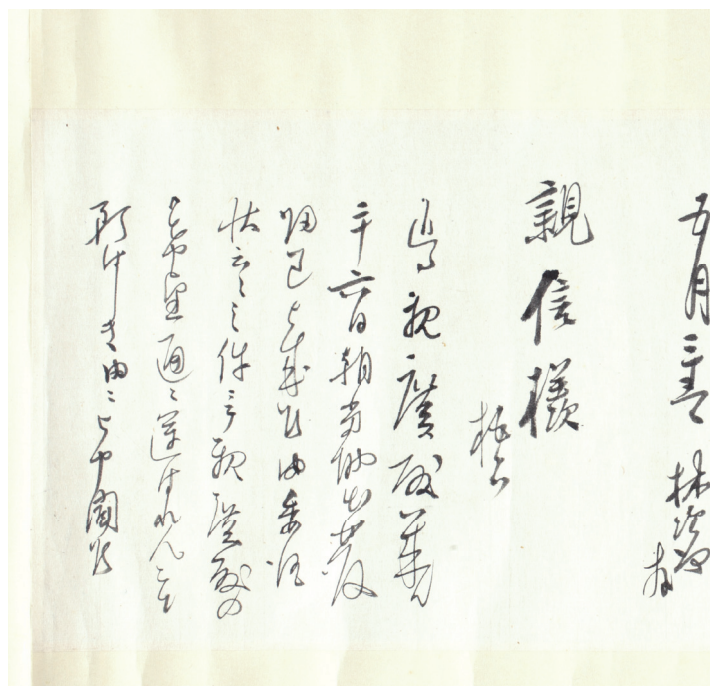
と被存候得共¹⁰一家の永遠の
利益と存し一存ニテ左様取
計候儀ニ御坐候何卒御推
察被下度且御賛成之上御助力
被下候ハ大慶ニ御坐候猶
此儀ニ就き來二十六日當
地出發一寸帰郷之上萬、
御話申上度兎ニ角金策之
件ニ就きて御含置被下度候
家主ハ契約たに成立し居らば
金ハ少く後れ候とも異存なし
との事此點も至極好都合
と存候猶萬く拝眉の上
可申述候 草々不一

五月二十三日 林次郎

拝

¹⁰ 「一家の永遠の利益と存し」
については、【補注7】に付す。

¹¹ 「五月二十三日」から「梧下」
まで、『全集』は削除。



親信様

梧下

追而親廣殿ハ來ル
二十六日朝當地出發
歸道被成候由委任
狀云々之件ニテ親廣殿の
御希望通ニ運はれんこと
願はしき由ニ被申聞候

【補注7】

樗牛は、明治三〇年二月一日、上野広小路の松源で結婚した。結婚相手は、杉亨二の娘、さとである。樗牛研究の中では、この杉家について、多くの言及はなされていない。『全集』に収録されている書簡から、樗牛が養家、実家に示した紹介の言葉を引いてみる。

○明治三〇年一月四日養父久平宛書簡

扱私事も妻を迎ふべき時機と存じ、種々熟考之上、此度、東京学士会院会員杉亨二氏の二女同姓サツ子を貰候事に決心致し、近々結納取かはし之運に致度存候。杉氏は旧幕人にて、日本の最も古き洋学者にて、(中略)名譽位置の高き人にて候。(中略)資産も中人以上にて、邸宅も中々広大にて、官員ならば勅任位の人に相見候。姉なる人は東京工業学校長手島精一氏に嫁し、其他親族の關係は何れも位地ある人のみに御座候。サツ子は年廿二年一ヶ月にて少々ふけたれども、従来の経歴等には何の欠点なく、且教育氣質等も申分なく、立派とのこと御座候、容貌も可なり御座候。右は出来得る丈精細探索之上、又太田氏にも相談之上決心致候事に御座候間、無御懸念御容被下度奉願上候。

○明治三〇年一〇月四日実父親信宛書簡(『高山樗牛資料目録』から判断すると、作成は一月四日とみるべきである。)
扱妻之事、此度東京学士会院会員杉亨二氏二女さつ子を双方熟議の上結婚之事に取極申度、新士町へ今日

申送候。家庭教育其他之事は万々欠点無之様にて、身体ハ大丈夫にて、年は廿二年一ヶ月、其両親は小石川に立派なる邸宅を有し、下女三人・車夫一人を有し、家族十余人之暮しをなし居る仁に候。(中略)又遺伝病もなし。其辺は精々一ヶ月余の月日もて充分探索致候上に候。右御容認被下度候。尤も結婚費用は少くとも二百円はかゝり候間、急には出来ず、来月初旬か中旬にいたし候。右費用も一切小生手元にて自力弁し申候。借金ハ一文もいたさず候。

二通とも、妻となる筈の女性の名を間違えて伝えており、後便で養家、実家に訂正している。その一方で、「旧幕人」「日本の最も古き洋学者」「学士会院会員」と亨二を伝え、さとの姉の嫁ぎ先から、兄の妻となった女性の父を引き合いに出すなど、樗牛の意のありどころには、注意が必要かもしれない。かつて養父が進めた結婚をきっぱりと断った時の発言とともに、樗牛という人物をはかる資料として重要になるであろう。

杉亨二は、文政十一年一〇月、長崎に生まれ、明六社一〇人のうちの一人であった。鳴原邦充「杉亨二について」(『神戸文化短期大学研究紀要18』一九九四・三・三一～三二、ONLINE: オンラインオープンアクセス)は、次のように記す。明六社の一〇人は、ほとんどが士族であるが、「唯一の例外は杉亨二で」「後に杉は幕臣となるが庶民の生まれであった」とする。

大橋隆憲『日本の統計学』(一九六五・四 法律文化社)によると、杉は「統計調査史上では、日本での最初の近代的統計調査」の開拓者、「統計理論史上では、ドイツ社会統計学の最初の紹介者として、日本における近代統計学の出発点に位置する」とある。樗牛の言う、「日本の最も古き洋学者」であったわけで、大正六年一二月四日に九〇歳で没している。

杉亨二の孫、杉勇に「祖父・杉亨二のことども」(前掲)がある。樗牛の妻となった「さと」について、左のように記している。

次のさとは、高山樗牛に嫁ぎましたが、樗牛が京都大学の実術史の教授になることになり、海外留学への出発間近かに樗牛は咯血し、鎌倉、逗子、大磯と転地療養の末、あの有名な「吾人はすべからず現代を超越せざるべからず」という文句を残して亡くなりました。お墓は清水市の竜華寺にあります。その長女はつとこのがおりましたが、若くして亡くなり、高山家は絶えてしまいました。樗牛の没後、さとは樗牛の生れ故郷の鶴岡に戻らず、東京に残って祖父亨二の世話をすることになり、祖父が死ぬまで身の廻りのすべてをやっております。さとは、第二次大戦の終戦になる少し前に疎開先の千葉で亡くなりました。

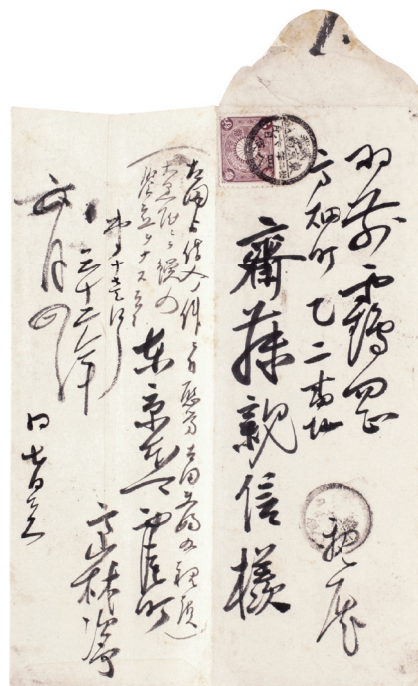
引用が樗牛の死の先へと進んでしまったが、樗牛は、結婚によって、守りゆかねばならない、大きなものを背負ったことになる。

しかも、鶴岡には、経済的な不安を抱えた養父母がいる。家屋購入の話には、妻だけではなく、養父母への計らいが加味されていた可能性もある。三二年五月一日(『全集』)、であるから、本書状の一週間ほど前であろう。樗牛は、実父親信宛に、次のような手紙を書き送っている。

扱、私両親(原文欄外註・養父母)も老年に赴かれ候事なれば、(中略)兼てより思案罷在候処、兎角私身之地盤も定まらず、此際東京へ御引移相願候も如何かと躊躇罷在候。然るに目下は米薪之資に差支候事も無之様略々見込も相つき候間、都合次第御引越如何と被存候。(中略)月々十五円以上も家賃相出候は如何にも不経済に有之、夫よりは一そ中ぶるにて一家相求(地面ツカズ)候方利益かと被存候。

しかし、「古物は月貸拾五円位のもの千円にて購求致可得相場に御座候。」ともあって、すぐに支払える金額ではない。養父の田地売払代金を充てていくわけにはいかないだろうかと、実父に打診、つまり、そのような話を養父にしてよいものだろうかと尋ねているのである。その方が「家政の前途之為にも大に経済なるべきか」と判断したからである。

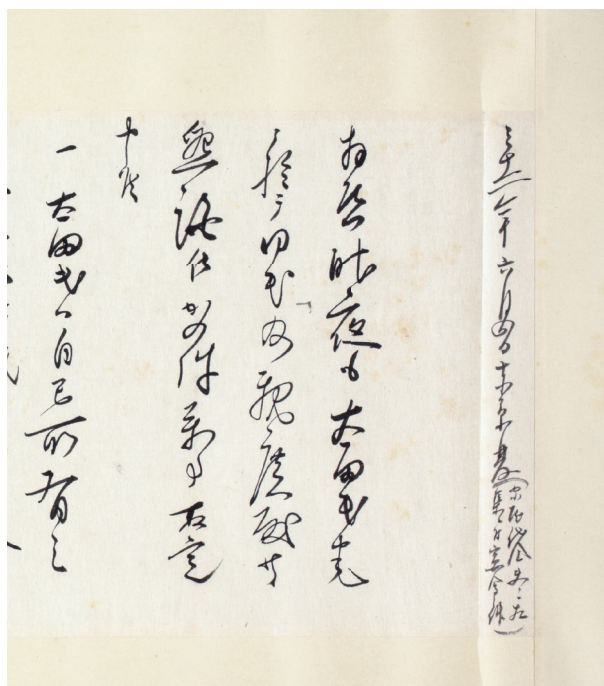
注10に示したように、本書状には「一家の永遠の利益」という言葉があり、この問題が当時の樗牛を動かしていたといえそう。



封筒表

封筒裏

卷紙



〔宛先〕

羽前鶴岡

高畑町乙二番地 親展

齋藤親信様

〔切手〕

参銭

〔消印〕

武藏ノ東京駒込ノ卅二年六月ノ四日ノへ便

〔差出〕

（不鮮明）

東京本郷西片町

高山林次郎

〔日付〕

六月四日

〔付記〕

太田方借入ノ件ニ付慰勞太田夫婦及親廣

大黒屋ニテ鰻の

饗應ヲナス云々

〔付記〕

才十壹号

（二字抹消） 三十二年

（六月四日の下に） 同七日着

〔付記〕

三十二年六月四日東京發〔家屋代金夫々相集候付宴會之件〕

拝啓昨夜も太田氏宅

ニ於テ同氏及親廣殿共

懇談仕かの件萬事取定

申候

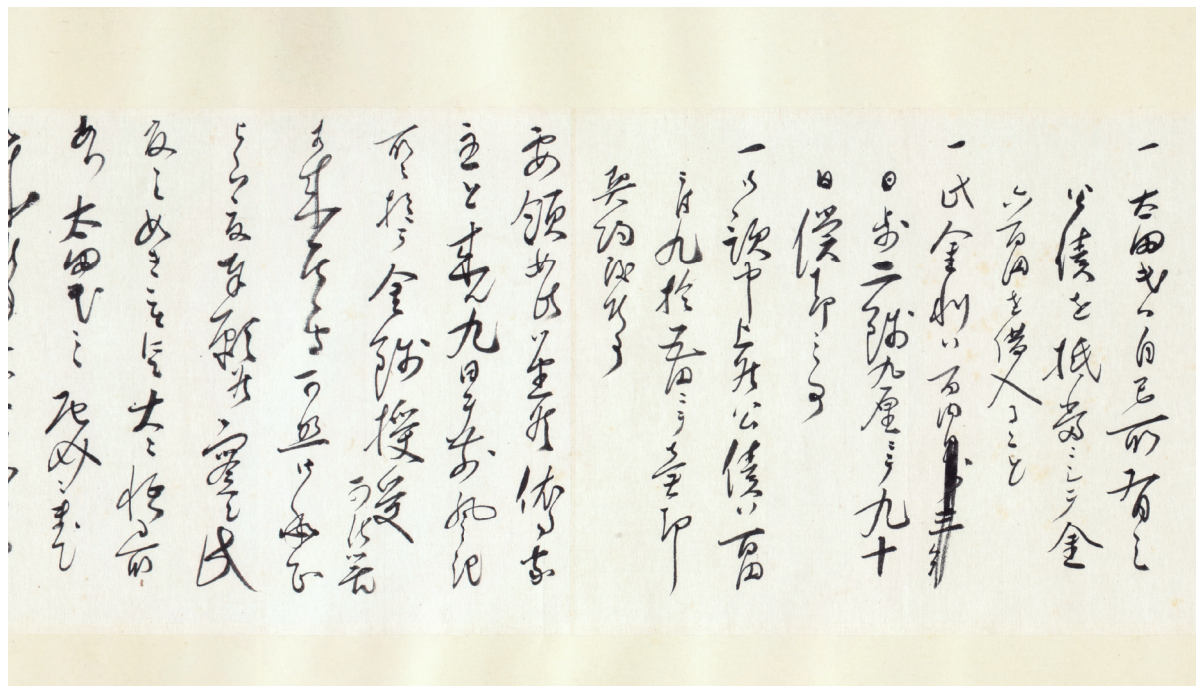
一 太田氏ハ自己所有之

書簡53-3-1

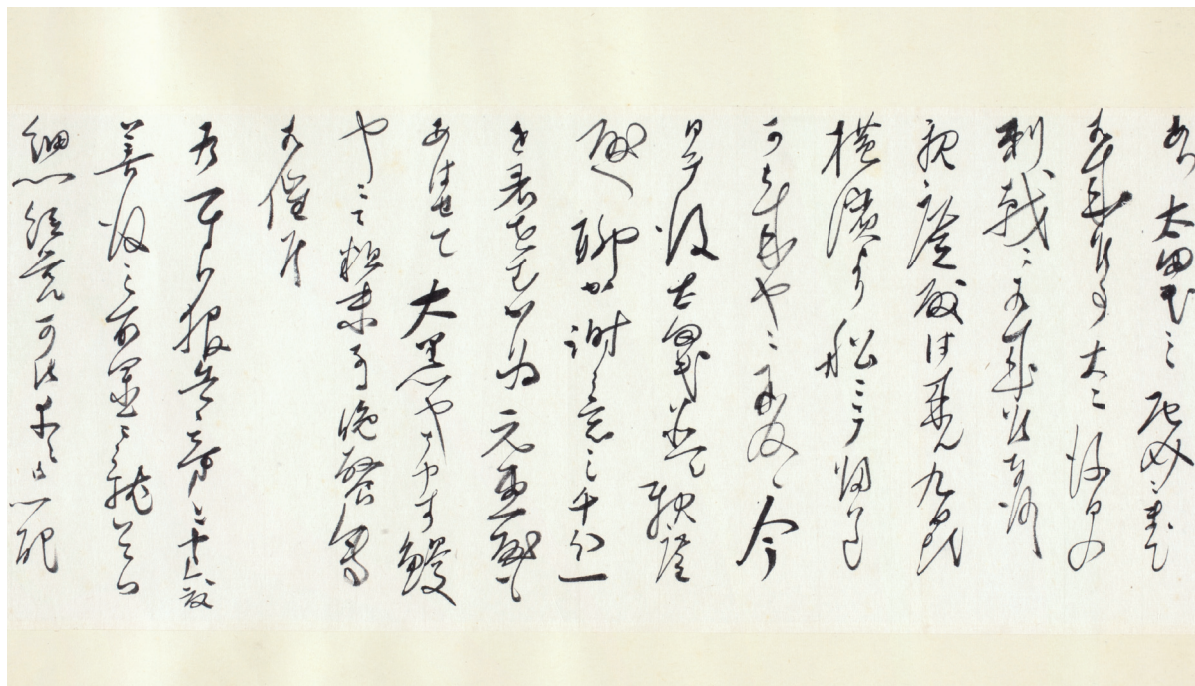
『全集』既収録。封筒表裏の記載は削除。「東京よりノ国元の実父へ」とする。

1 書簡後付けの「六月四日」と、消印の「卅二年」に拠った。

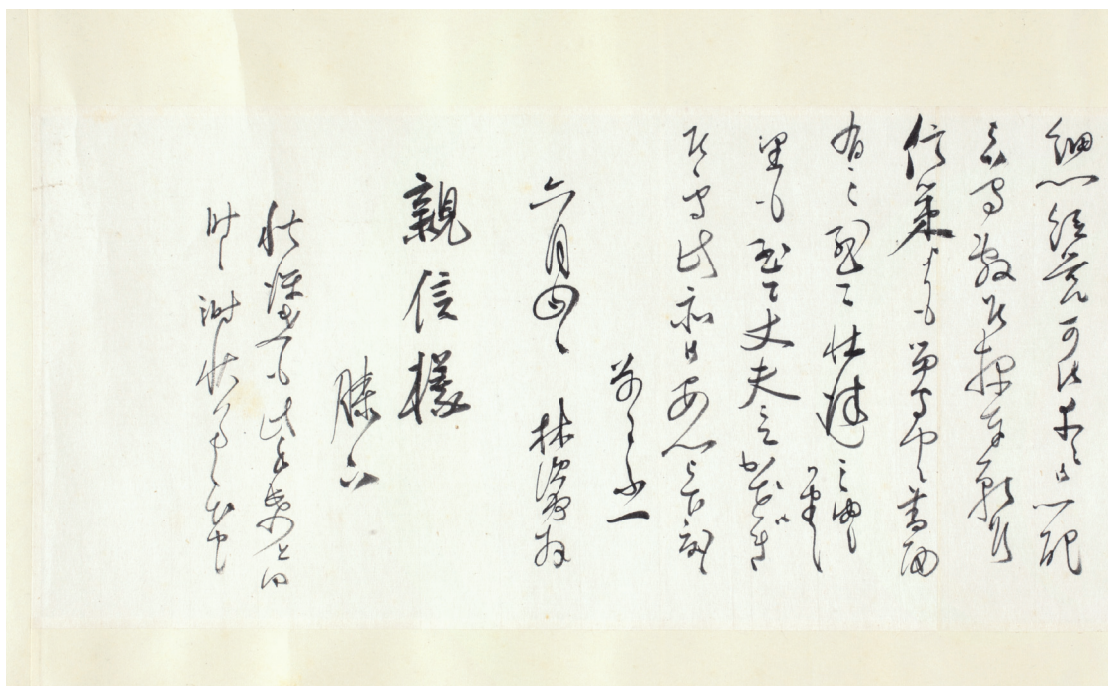
2 「三十二年六月四日」から「宴會之件」まで、『全集』は削除。



公債を抵當ニシテ金
 六百円を借入ること
 一 此金利八百円 (文字抹消)
 日歩二錢九厘ニテ九十
 日償却之事
 一 御預申上候公債八百円
 二付九拾五円ニテ賣却
 契約致候事
 要領如此御坐候依て家
 主と來ル九日午前登記
 所ニ於テ金錢授受可仕筈
 相成居候間可然御承知
 被下度奉願候實ニ此
 度之如きことにて大ニ悟る所
 あり太田氏之厄介ニまで



相成候事大ニ後日の
 刺戟ニ相成候奉存候
 親廣殿は來ル九日頃
 横濱より船ニテ帰道
 可被成ヤニ承及候今
 日午後太田氏並ニ親廣
 殿へ聊か謝意之千分一
 を表せむか為元惠殿も
 あはせて大黒ヤと申す鰻
 ヤニテ粗末なる晚餐會
 相催候
 右一寸御報告旁々申上度
 善後之所置ニ就いてハ
 細心經營可仕幸ニ御心配



被下間敷候様奉願候

信策よりも留守中ニ書面

有之至て壮健之由に御坐候

里も至て丈夫ニてかせぎ

居候間此亦御安心被下度候

草々不一

六月四日 林次郎拝

親信様

膝下

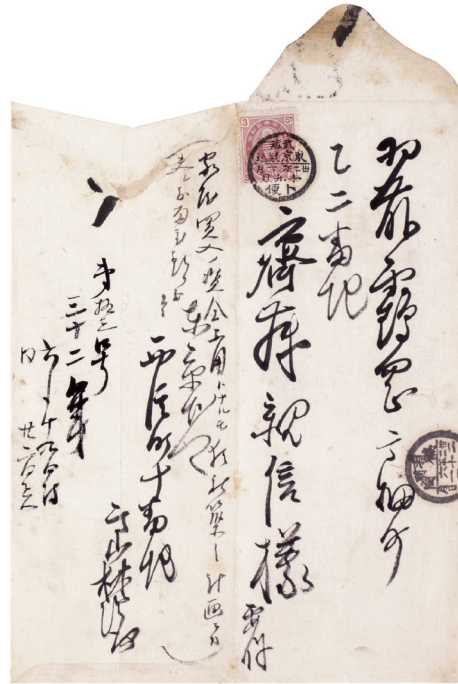
秋澤氏へも此手紙と同時に謝状差出申候

3 橋牛の妻さと。

4 「六月四日」から「差出申候」まで、『全集』は削除。

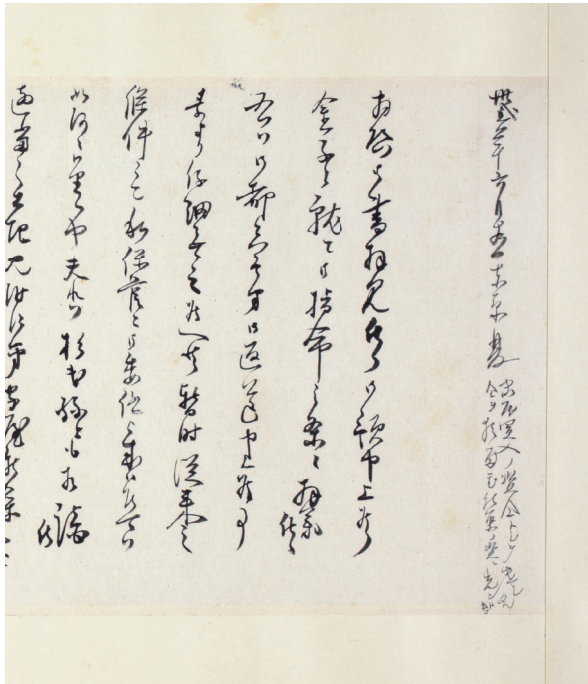
25
明治三二（一八九九）年六月一九日

封筒 卷紙 墨書



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕 羽前鶴岡高畑町

乙二番地

齊藤親信様

要件

〔切手〕 三銭

〔消印〕 武蔵／東京駒込／卅二年六月／十九日／ト便

羽前／鶴岡／卅二年六月／二十一日／（不明）

〔差出〕 東京本郷

西片町十番地

高山林次郎

〔付記〕 家屋買入ノ資金不用トナルモ猶新築之

計画ニ付

夫レ別留置願上云々

〔付記〕 才拾三号

三十二年

六月十九日付

同 廿二日着

〔付記〕 卅貳年六月十九日東京發

猶留置新築ノ資
ニ充ント云々

家屋買入ノ資金ト
シテ遣シタル金ヲ

拝啓御書拝見仕候御預申上候

金子ニ就て御指命之条々拝承仕候

右は御都合次才御返送申上候事

素より仔細無之候へ共暫時従末之

條件にて私保管ニ御委任被成下候てハ

如何に御坐候や夫れハ杉氏³孫とも相談仕

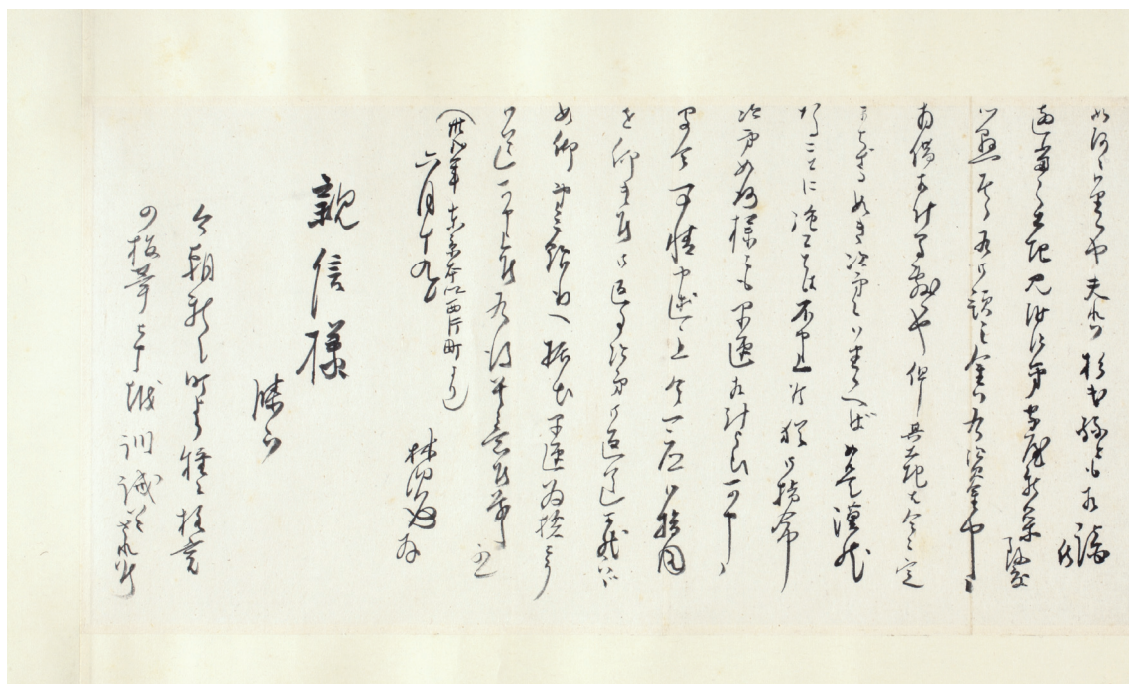
書簡53-3-2

『全集』既収録。封筒表裏の記載は削除「東京より／国元の実父へ」とする。

1 書簡後付けの「六月十九日」と、消印の「卅二年」に拠った。

2 「卅貳年六月十九日」から「新築ノ資ニ充ント云々」まで、『全集』は削除。

3 杉亨一。樗牛の妻さとの父。『全集』は「杉氏杯」。「孫」は「遜（へりくだる）」に等しい。



適當の土地見附次才家屋新築致度
 心懸居候右御預之金ハ右資金中に
 拝借相計間敷候ヤ但し其土地は今に定
 まらざる如き次才ニ御坐候へば如是漠然
 たることに強てとは不申上候猶御指命
 次才如何様ニも早速相計らひ可申候
 間今事情申述候上今一應御指図
 を仰き候御返事次才御返送可然候ハ
 如仰才三銀行へ振出早速為換ニテ
 御送可申上候右得貴意候草々不一
 (卅⁵年東京本郷西片町より)
 六月十九日 林次郎拝
 親信様
 膝下
 今朝新之町より種々格言
 の拔萃被申越訓誡いたされ候

4 『全集』は「右」。

5 「(卅⁵年)」から「膝下」まで、『全集』は削除。

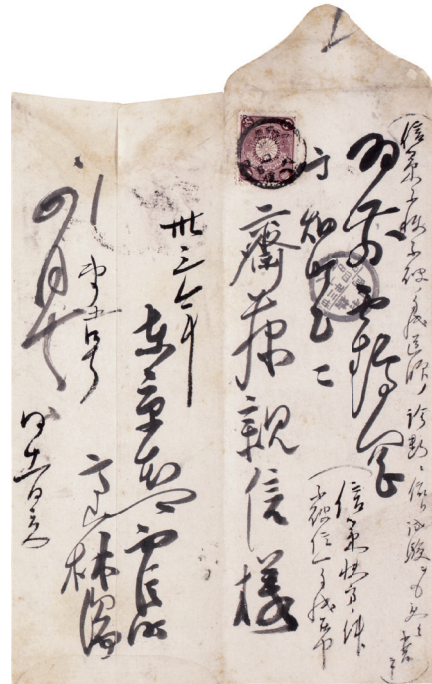
【補注8】

明治三十二年五月二三日実父宛書簡（書簡23）、明治三十二年六月四日実父宛書簡（書簡24）二通を見る限り、家の買い入れはそのまま進むかのようにあったが、実際には、この家屋は購入されずに終わっている。明治三十二年六月九日の実父宛書簡（『全集』）には、次のような文章がある。

扨家屋之一條は、昨日断然破談仕候。右は後ニて相糺候処、家相申分有之、且從來不吉之事も多少有之候様子。知らぬ中は兎も角、一旦知候上は、婦女子などは如何にも感情あしく、将来の爲にも相成間敷と存し、家主及び笹川へは非常ニ具合あしく候へ共、断然右破談と相定申候。

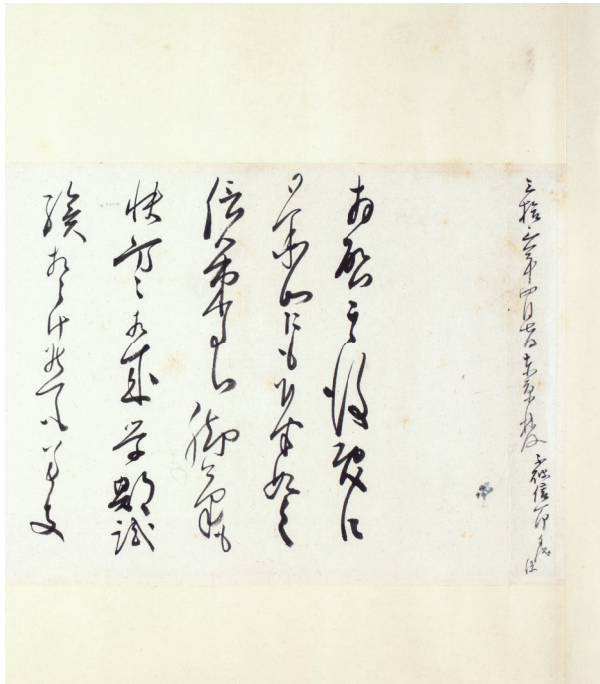
調べてみると、家相が悪く、「不吉之事も多少有之」とあって、親廣にも会ったが、「破談之事には皆々賛成被致候」と記されている。

封筒 卷紙 墨書



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕 羽前靄岡

高畑町乙二

齋藤親信様

参銭

〔消印〕 武蔵／（不鮮明）／八日／□便

羽前／靄岡／卅三年四月／十日／へ便

〔付記〕 （信策不快不破ノ手紙医師ノ診断ニ依リ試験ヲも受く不着云々）

（信策快方ノ件

不破信一手紙在中

〔差出〕 東京本郷西片町

高山林次郎

〔目付〕 四月七日

〔付記〕 卅三年

才五号

同十一日着

〔付記〕 三拾三年四月七日東京發 不破信一郎

手紙添

拝啓其後既に

御承知にも候半如元

信策事ハ脚氣も

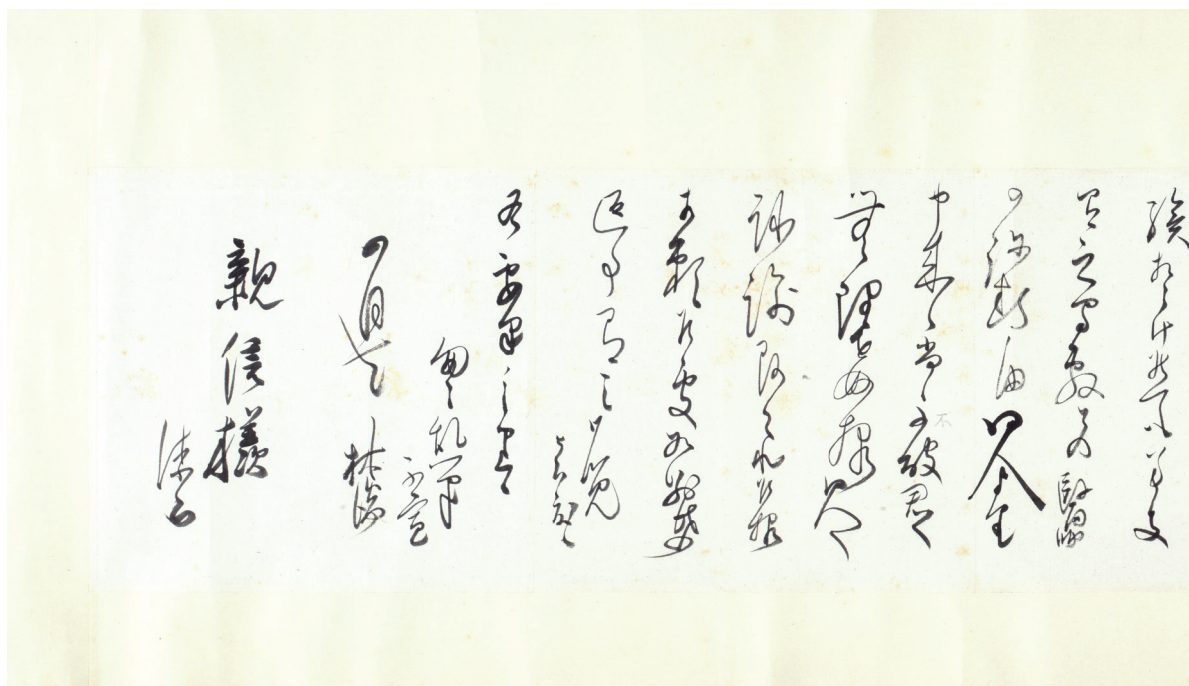
快方ニ相成学期試

験相うけ候ても差支

書簡53-3-3-1（封筒）
書簡53-1-4（本文）
『全集』未収録。

1 後付けは、「四月七日」。樗牛は明治三三年四月六日、弟信策の脚氣と学期試験について、不破信一郎から手紙（本学所蔵）を受け取っている。その不破書簡に本書簡を添え、実父へ郵送したものである。

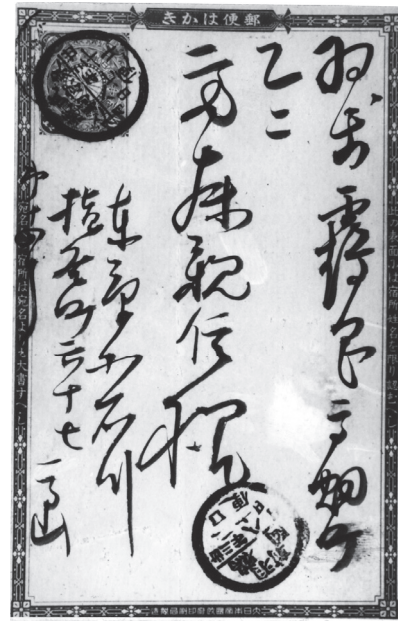
2 「不破信一郎」のこと。



有之間敷との醫師
 の訖断ノ由同人より
 申來候尚不破君へ
 無理せぬ様同人へ
 訓諭致くれ候様
 相頼候處如別帋
 返事有之御覽被下度候
 右要用ノミ申上候
 勿々乱筆
 不宣
 四月七日 林次郎
 親信様
 膝下

27 明治三三（一九〇〇）年八月一七日

葉書²
墨書



葉書表

〔宛名〕 羽前鶴岡高畑町

乙二

齋藤親信様

〔差出〕 東京小石川

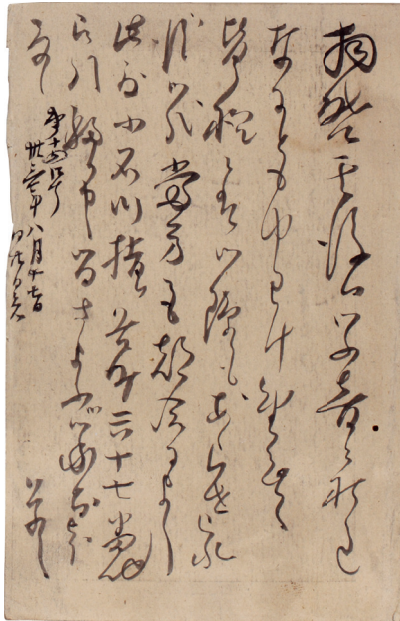
指ヶ谷町六十七

高山

〔消印〕 東京駒込／卅三年八月／十七日／リ便

羽前／鶴岡／卅三年八月／二十日／ロ便

〔付記〕 才十四号



葉書裏

拝啓其後ハ御不音ニ打過

なにと申わけ無御坐候

皆様ニは御障も、あらせられ

ず候哉當方も都合により

此度小石川指ヶ谷町六十七番地

に引移り申留さよふ御承知被下

度候 草々

〔付記〕 才十四号

卅三年八月十七日

同 廿日着

書簡53-4-18
『全集』未収録。

1 東京駒込消印「卅三年八月／十七日」に拠った。

2 明治三二年四月一日に郵便料金が上がり、葉書一枚が一錢五厘となった。

3 妻さとの実家も指ヶ谷にあった。

【補注9】

明治三三年三月三〇日、高山樗牛は、留学に旅立つ学友姉崎正治を、横浜に見送った。ドイツ・イギリス・インドに向かう旅であった。

旅立った姉崎と、見送った樗牛の往復書簡は、『全集』収録書簡の中でも注目すべき問題を包含しているが、今ここで追おうとしているのは、その樗牛に、留学すべしとの命を、文部省が下した点である。

樗牛の留学は、「官報」第五〇八二号（明治三三・六・一三 印刷局）に報じられた。「審美学研究ノ為満三年間独仏伊三箇国へ留学ヲ命ス 高山林次郎」とある。樗牛の体調が芳しいものであったとは考えにくいものがあるが、樗牛にとって留学に赴く喜びは極めて大きく、様々な準備を進めていたようである。

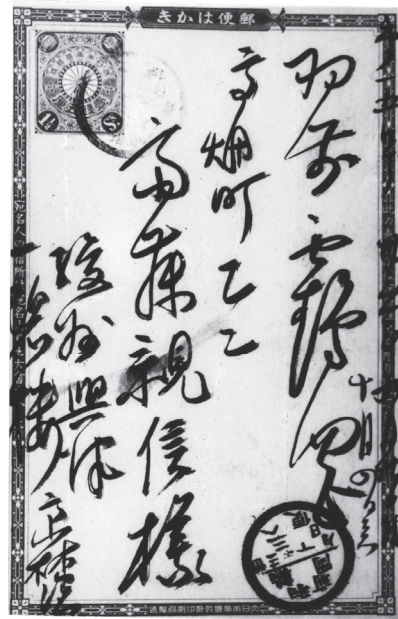
明治三三年五月二〇日、樗牛は養父久平宛に、左の書状（『全集』）を送っている。

扱是度私事文部省留学生として欧羅巴へ派遣被仰付、多分今月末には辞令交付可相成候、但出発は今年度中にて、多分来年二月ころなるべくと存候。是は美学並に美術史研究の為に、年限は三年、帰朝後は京都帝国大学に教授として奉職之予定に御座候。過日専門学務局長並に京都大学総長に面談の上相定め候事に御座候。（中略）右洋行之事はかねての本願にて、私出身之為には至極幸之事と喜居候。殊に京都は土地もよく、大学も新設之事なれば、万事尽力甲斐ある事と存候、御喜被下度候。

樗牛の妻さとは妊娠中で、まだ分娩の様子はないものの、出産が近いことは明らかだった。待望のわが子が誕生するのは翌六月の一日、養父宛書簡に「唯今電報差上候通、今暁午前二時半、お里事女子分娩、母子達者に有之候間、乍憚御安心被成下度候」と伝えている。

問題は洋行中の留守をいかに守るかであるが、妻さとの父杉亨二の孫である杉勇の「祖父・杉亨二のことども」（前掲）には、「祖父の家は小石川の指ヶ谷町72番地にありました」とあり、当初は、洋行中、さとを杉へあずけることも考えていたようである。樗牛一家はひとまず指ヶ谷の地を選び、そこに転居するという方法をとったのであろうか。

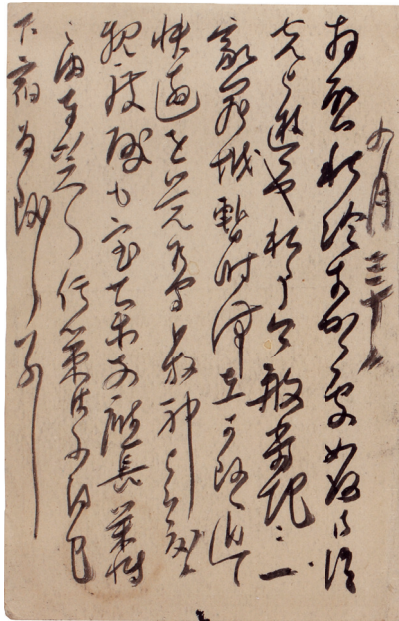
洋行の夢とわが子の誕生、帰国後の京都帝国大学教授就任、樗牛にとって、この上もない話であったのであるが、すでに、十全の飛躍を許すだけの力を失っていたのかもしれない。三三年八月八日、咯血の日を迎えることになる。



葉書表

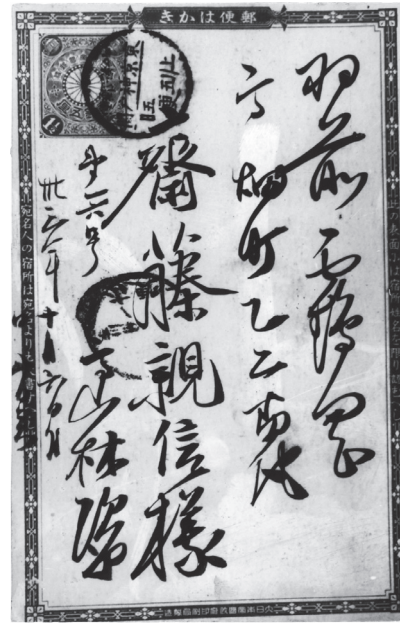
〔宛先〕 羽前鶴岡 高畑町乙二 齋藤親信様
 〔差出〕 駿州興津² 一碧楼 高山林次郎
 〔消印〕 （印字不明）
 羽前／鶴岡／卅三年十月／三日／へ便
 才一五号 卅三年九月卅日付
 十月四日着

葉書裏

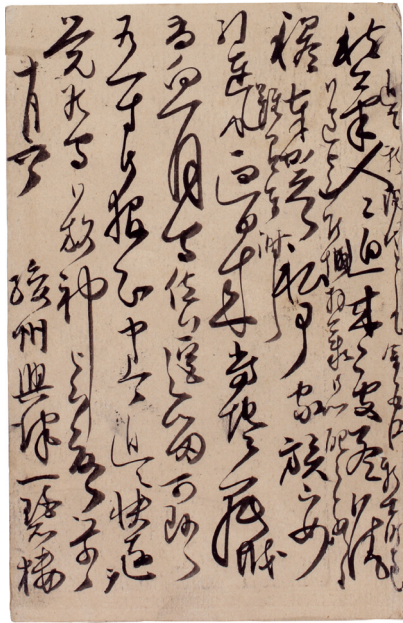


九月三十日
 拝啓秋冷相加候處如何御消
 光被遊候や私事今般當地二一
 家罷越暫時滞在可致候追、
 快適を覚候間御放神被下度候
 親廣殿も室蘭支廳³長栄轉
 の由奉賀候信策は不得已
 下宿為致候早々

葉書
墨書



葉書表



葉書裏

〔宛先〕 羽前靄岡

高畑町乙二番地

齋藤親信様

〔差出〕 高山林次郎

〔消印〕 鉄道郵便/東京神戸間/□□□□□五日/上リ

五便

（不明）/卅三年（不明）/ホ便

〔付記〕 第一六号

卅三年十月六日付

同 十日着

追て 新聞代として金五円新土町迄

秋氣人ニ迫來候處益御清

御送被下候事（文字訂正） 拝承御心配之段々

穆奉賀候私事家族下女

難有奉謝候

引連れ過日來當地ニ罷越

尚向一月間位ハ逗留可致候

右一寸御報知申上候追々快適ヲ

覚候間御放神被下度候草々

十月六日 駿州興津³一碧楼

書簡53-4-20

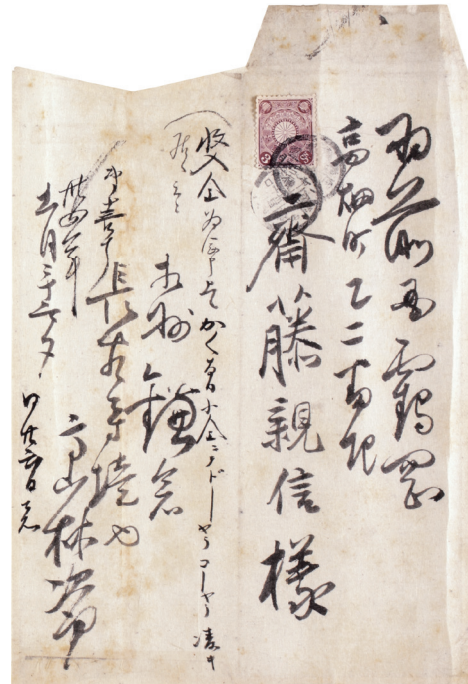
『全集』未収録。

1 後付けに「十月六日」とあり、年は、消印に拠った。

2 丸一型鉄郵便。公達第二六七号により明治三二（一八八九）年八月一〇日施行。各停車場より汽車で託送する鉄道郵便物に押した引受印。最初に東京神戸間、米原敦賀間、大府武豊間で使用された。表示は郵便局名であり、途中の受渡駅名は示されないことから該当郵便物取り扱い局の解明は困難である。使用は明治三九（一九〇六）年に時刻入型鉄郵便に改正されるまでの一七年間。切手では新小判切手と菊切手に、葉書では小判はがき、菊はがきの紐梓、青梓に見られ、本葉書は、菊はがきの青梓。参考 北出博『鉄道郵便印1875-1984』（1990年2月 日本郵趣協会）

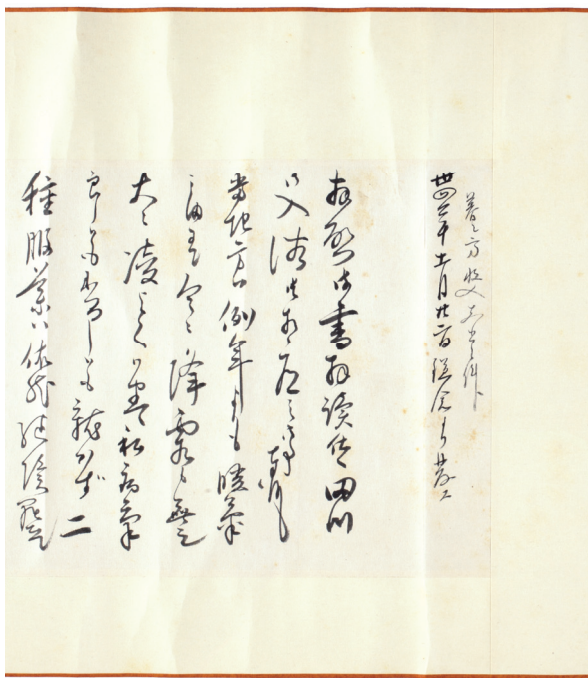
3 妻さとは、「興津にも、可成り居りました。西園寺さんのお屋敷へ参ります途中の、水口屋でございます。海に面した一棟で、よいお部屋でした。」（思ひ出の轡牛その1）（前掲『文豪高山樗牛』所収）と回顧する。

一碧楼水口屋は、昭和六〇年一月三十一日をもって廃業したが、現在、「一碧楼 水口屋ギャラリーフェルケール博物館別館」となっている。



封筒表

封筒裏



巻紙

〔宛先〕 羽前国鶴岡

高畑町乙二番地

齋藤親信様

参銭

〔消印〕 (印字不明) 二十三日

□□／鶴岡／□□四年十二月／(印字不明)

〔差出〕 相州鎌倉

長谷寺境内

高山林次郎

十一月二十二日夕

〔付記〕

収入金為念申上候かくなる小金ニテド

ーヤラコーヤラ凌キ

居候 云々

〔付記〕 才十三号

卅四年

(十一月二十日夕の下) 同廿六日着

〔付記〕 暮³シ方收入支出之件

〔付記〕 卅四年十一月廿二日鎌倉より發ス

拝啓御書拝讀仕候田川⁴

御入浴御相應之御事奉存候

當地方ハ例年よりも暖氣

之由にて今ニ降霜も無之

大ニ凌よく御坐候私病氣

良しともわろしとも就かず二

種服藥ハ依然繼續罷在候

書簡53-3-3-2

『全集』既収録。封筒表裏の記述は削除、「鎌倉より／国元の実父へ」とある。

1 後付けの日付と年は、消印断片、「長谷寺境内」差出等から三四年と判断。「付記」や『全集』における三四年も参考にした。

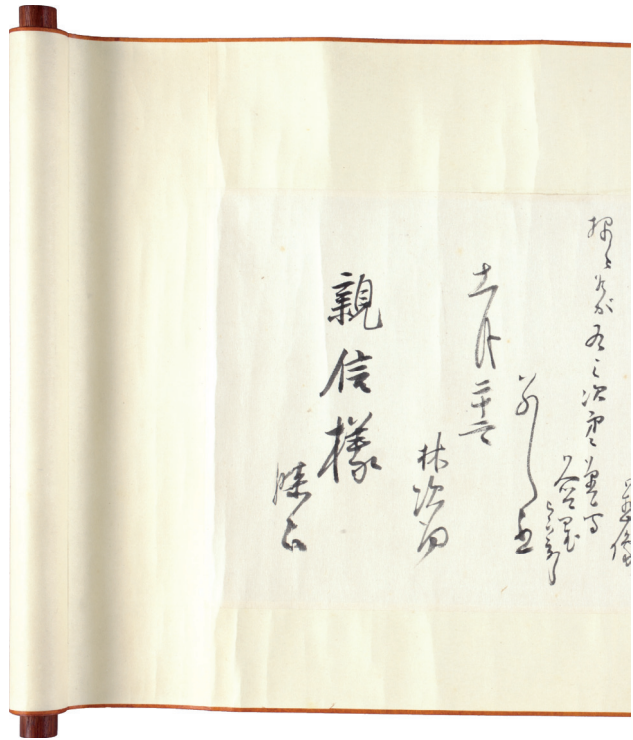
2 樗牛は晩年、鎌倉長谷寺境内に過ごした。逝年(明治三五・一二・二四)後、葬儀は長谷寺で行われた。

3 「暮シ方」から「發ス」まで、『全集』は削除。

4 田川は、庄内・田川の湯として親しまれた温泉地。

種服系は体術に修習
 学位ヲ就キリヤ聊一付
 筆名を収めねば収入を名
 増之故に月七拾四報酬
 手元より年式百円手當金あり
 三月六十四の外入りの外に大
 月額七十六円許ニ御坐候、是にて
 新シ町へ十円ツ、外一切支拂候事
 なれば実ニ大抵之事ニ無之候
 月四回又ハ五回講義之為上京
 スル費用ノミにても十三四円は相かゝり
 申候家賃牛乳代とも二十五円ハ
 かゝり候御推察被下度候
 健康之身ナラバドウにも相成
 候へども今之處にてハ何分心ニ
 任せず、右之小金にてドーヤラコーヤラ
 其月々凌ぎ居申候(二字抹消)先日之
 御書に百円以上も収入ある如く
 御想像之
 ちん
 林次郎

学位に就キ御申越之件
 承知仕候扱私収入為念申上候
 博文館より月々七拾四報酬
 あれども内十円ハ今春少く用立て
 もらひ候分ニなしくづし、手元
 ニハ六十円之外入り不申候外ニ大
 学より年式百円手當金あり
 月額七十六円許ニ御坐候、是にて
 新シ町へ十円ツ、外一切支拂候事
 なれば実ニ大抵之事ニ無之候
 月四回又ハ五回講義之為上京
 スル費用ノミにても十三四円は相かゝり
 申候家賃牛乳代とも二十五円ハ
 かゝり候御推察被下度候
 健康之身ナラバドウにも相成
 候へども今之處にてハ何分心ニ
 任せず、右之小金にてドーヤラコーヤラ
 其月々凌ぎ居申候(二字抹消)先日之
 御書に百円以上も収入ある如く
 御想像之



様ニ候が右之次才ニ御坐候間

御含置

被下度候

草々不一

十一月二十二日⁶

林次郎

親信様

膝下

⁶ 「十一月二十二日」から「膝下」まで、『全集』は削除。

【補注10】

樗牛が留学の話をことの外喜んだ点については、【補注9】に記した。しかし、樗牛は、明治三年八月八日喀血し、出発は延期となる。楽しみにしていた洋行が延期されたばかりではなく、病は結核で、しかも、回復は速やかにいかなかった。

明治三年八月二二日、「東京駿河台佐々木病院より／独逸キールの姉崎正治へ」とした書状が『全集』にある。

僕は今の場合、君を満足する手紙が書けないのは、実に非常の遺憾だ。是の手紙の字体が僕の通常でないのを怪しみ給ふな！病床に仰臥して覚束なき筆を操るなれば。

僕は来月八日には立ちかねる。今月八日から思ひもよらぬ肺患に冒されて、駿河台の佐々木病院に入て、談話も運動も止められて居る。病氣は、吾ながら因由が分らない。八月七日葉山の海水浴より帰りて、笹川の誕生日の祝宴に招かれ痛飲し、其晩十一時までのみ、翌日は二日酔と云ふ痛飲をした。翌日午後、余り気分がわるいから寝たら、俄然30g¹斗の血を吐いた。早速医師に見せたら、肺には異状はない。咽喉が悪いのだと云ふ。是は勿論さうあるべきだと思ひ込で、別に怪みもせなんだ。処が喀血が翌日もあり、翌々日もある。

結局、「左肺に欠点がある」と言われ、「僕の運命は目下の場合一頓挫した。」と認めざるを得なくなる。しかしその後も回復が遅れ、出発も延期、さらにまた延期と、本人の留学への志だけは動かぬものの、実行には結びつかない日々が続くことになる。そしてついに、明治三四年三月二四日、養父宛に、洋行を断念する手紙を書き送ることになる。

扱かねてより御心配相懸候洋行之件は、其後熟考仕、此際なまじい延期せず、断然辞退之事に決心仕、昨日上京、それ／＼取纏致居候、依て不取敢御報知申上候。今回之渡航を楽しみに保養罷在候ひしが、右之事情に立到り、一時は落胆致候得共、不如意勝之人事、無已事とあきらめ申候。今後如何に身を処し可申や、目下之処未定に有之、追て御報可申上候。

「昨日上京」に見るとおり、樗牛はすでに、断念後の事後処理を始めていた。姉崎宛書簡 明治三四年三月二四日『全集』がある。

君！僕は如何にして目下の情を君に言ひ表はすことが出来やうか。洋行は断然見合はせることに決心した。予はこの決心を齎らして昨日大磯より上京し、それ／＼事を纏めつゝあるのだ。自分一人ならぬ身の、かばかりの病氣のために、数年来の希望を空しうするのは是非もないが、いさゝか遺憾にたえぬ。

妻さとは「思ひ出の樗牛 その1」（前掲）に、次のように述べている。

洋行は、大変楽しみにして居りました。文部省では、長引くといけないといふので、上田さんからの言伝でございました。それでも、自分では行くつもりで居りました。いよく見合せといふことになりましたら、それは／＼弱つて居りました。気の毒な位でございました。

「それでも、自分では行くつもりで居りました」と妻はいう。

一つ目は、病。二つ目は、文部省。そして、三つ目の理由が、故郷両親の説得にあったと思われる。三月三一日、「東京より／群馬県太田町の三浦菊太郎氏へ」として『全集』に収録された手紙に次のように記している。

色々事情有之候て、洋行は相止め申候。医師は大抵無差支と云ひ、自らも無不可と信じ候へども、故郷の両親大の不賛成にて、如何ともしがたし。こゝは一番観念所とあきらめ、（略）此にて元の奎阿弥に相成申候。

「故郷の両親大の不賛成」は、樗牛にとって、それだけ大きなものであったということである。両親は、何を以て不賛成としたのか。あるいは、不賛成の旨を語る両親の内に、樗牛は何を見たのか。高山樗牛という人物を論ずる場合の一つの論点として、注目しておきたい。